2.　古代史概観

2．1　古代前期の出現期と突破期（紀元前21世紀後半～紀元前13世紀後半）

人類が金属の精練と製錬（以下、まとめて「精錬」と呼ぶ）をはじめたのは紀元前4000年頃で、最初に精錬した金属は金と銅である。人類は紀元前3500年頃から錫の精錬もはじめ、銅と錫を調合して青銅をつくり、青銅器をつくるようになる。人類が銀の精錬をはじめた時期は不明であるが、おそらく錫の精錬をはじめた時期と同じで、紀元前3500年頃である。

人類が農業をはじめた時期はかなり古い。しかし都市を建設しはじめた時期は、青銅器をつくりはじめた時期とほぼ同じである。紀元前3500～紀元前3000年頃、オリエント各地で城郭都市＝古代都市が誕生した。

（歴史家たちは、ユーフラテス川流域とチグリス川流域間のデルタ地帯を「メソポタミア」と呼んでいる。他方、考古学者たちは、ナイル川東岸からインダス川西岸までの広い範囲がひとつの経済圏であったと考えている。本書では、ナイル川東岸からインダス川西岸までの地域を「オリエント」と呼ぶ。アケメネス朝ペルシャは、オリエント全域を支配したが、オリエントの外部（北アフリカやインド）を支配できなかった。ちなみに、エジプトのピラミッドはナイル川西岸に集中している。ピラミッドが軍事施設であったという考古学者はいないが、中王国期のエジプトはナイル川を境界にして防衛体制を固めていたように思う。筆者は、インダス川東岸も同様であったと考えるが、本書では古王国期や中王国期のエジプト、およびインダス文明に言及しない）

紀元前2800年頃、メソポタミア中部の古代都市キシュにエンメバラゲシという「人類最古の王」が登場した。彼は軍勢を率いて東方に侵攻し、エラム人がザグロス山脈中腹（現在のイラン・イスラーム共和国シーラーズ市近郊）に建設した古代都市アンシャンを破壊する。とはいえ、エラム人が滅亡したわけではない。彼らはザグロス山脈南部にスーサ市を建設し、彼らの王を擁立してキシュに対抗する。他方、紀元前2600年頃、シュメール人がユーフラテス川下流域に古代都市ウルクを建設する。

（考古学者や歴史家たちは、キシュ市を建設したのはセム人で、スーサ市を建設したのはエラム人、ウルク市を建設したのはシュメール人である、と論じている。セム人とエラム人、シュメール人は王位継承規則が異なる。したがって、筆者もキシュ市やスーサ市、ウルク市を建設したのは異なる種族あるいは部族であったと考えるが、重視すべきことは王位あるいは「王権」である。セム人とエラム人が抗争を繰り返し、セム人が王権を樹立した後、エラム人も王権を樹立した。そしてシュメール人も王権を樹立する。王権樹立の動機は戦争である。戦火の拡大がメソポタミア各地に王権樹立を促した）

ウルク市が、人が居住するためだけの都市であったとは考えにくい。ギルガメシュ王がウルク市の城郭を築いたと伝えられているが、城郭内面積は400～600ヘクタールである。シュメール人が城郭を築いた目的は、おそらく野獣の囲い込みと家畜化である。ウルク市は広大な牧場で、同時に災害や飢饉、戦火から逃れた人々の避難所＝アジールであった。

野生の牛や山羊を囲い込み、家畜化したユーフラテス川下流域が人類最古の文明＝シュメール文明の発祥地である。やがてメソポタミア各地で牧畜がはじまり、商いもはじまるが、商いで金貨や銀貨を使用する場面はない。当時の商いで使用する貨幣は物品貨幣（穀物や家畜）である。また、大地は信仰の対象であり、売買の対象ではなかった。

（古代シュメールで金や銀は貨幣化していない。ギルガメシュ叙事詩に黄金や銀の記述はあるが、金貨や銀貨の記述はない。「イシュタルの冥界下り」には金銀の記述さえない。有名なウルクの「黄金の剣」は王家の象徴であるが、「財」ではない）

紀元前2270年頃、アッカド人がメソポタミア中部を支配する。アッカド人はサルゴン王とナラム・シン王の代に遠征を繰り返し、「四方領域（東のザグロス山脈中腹と西の北レヴァント、メソポタミア南部と北部）の王」を号した。そしてアッカド語を広める。広い地域でひとつの言語＝アッカド語を共通語化したため、歴史家たちは、アッカド人が支配した地域を「帝国」と呼ぶ場合がある。だが、当時のザグロス山脈中腹にはグティ人やエラム人、北レヴァントにはセム人やアムル人、メソポタミア南部にはシュメール人、北部にはフリル人やアッシリア人が定住している。アッカド人が彼らを征服したとは考えにくい。

サルゴンとナラム・シンはアナトリア半島にも遠征した。アナトリア半島南部のトロス山脈は銀や錫の産地である。おそらく、ナラム・シンは多量の銀を獲得した。そして自身を神格化する。だが、ナラム・シンの死後、後を継いだシャル・カリ・シャッリが暗殺され、アッカド帝国が崩壊する。その後メソポタミアは「誰が王で誰が王でなかったか」と語り継がれる動乱の時代に突入する。

（「動乱の時代」に、かなり広い範囲で気候変動が生じたかもしれない。サハラ砂漠は、緑地が多かったが、砂漠が拡大している。また、私見であるが、アッカド人は銀鉱石の産地を占領したが、銀の精錬技術を有していなかった。おそらく、ナラム・シンは征服した地域を分割し、分与して銀を獲得した。すなわち、銀は分与する土地の対価である。神格化は無限の大地を有限な「土地」に置き換え、分与する都合上の政策であったかもしれない。メソポタミア中部では、有力者間で銀と土地の交換＝土地売買も行われたように思う。だが、シャル・カリ・シャッリは自身を神格化していない。おそらく、彼は土地の分与を拒み、暗殺された。そしてシャル・カリ・シャッリの死後、土地の争奪がはじまり、「動乱の時代」がはじまる。余談であるが、サルゴンとナラム・シンは海を越えて銅の産地キプロス島にも遠征した、との言い伝えがある。銅は当時の武具の素材である）

紀元前2115年頃、シュメール人のウル・ナンムがユーフラテス川中流域のウル市でウル第三王朝を開く。そして人類最古の法典＝ウル・ナンム法典を編纂し、他方、古代シュメールに遡行して土地を「大地」に戻す。銀は残るが、土地の分与がなくなり、土地の争奪もなくなる。その後二代王シュルギが検地を行い、民衆＝農民から物品貨幣＝穀物を徴収した。歴史家たちは、この徴収が人類最古の「徴税」である、と論じている。

シュルギの死後、内乱が勃発し、穀物の生産量が減少して飢饉が勃発した。五代王イビ・シンが多量の銀を放出してメソポタミア北部から穀物の輸入を試みるが、銀と穀物の交換は困難であった。飢饉後、エラム人が侵攻してウル第三王朝を滅ぼす。エラム人の侵攻目的はおそらく家畜（馬、牛や山羊）の略奪で、エラム王がメソポタミア中部を征服する場面はない。

（人類が戦場で馬を使うようになったのはウル第三王朝期からである。ウル第三王朝は、ウル市西北のニップル市付近に広大な牧場をつくり、他方、毛織物業を育成した。そしてメソポタミア中部の各都市と軍事同盟を結び、軍事同盟ネットワーク＝古代帝国体制を構築する。銀は、ウル第三王朝が軍事同盟を結んだ都市間で流通した。たとえば、ウル市に隣接するエシュヌンナ市は、独自の法典＝エシュヌンナ法典を制定し、銀と穀物や羊毛、油や塩、銅との交換レートを定めている。だが、ウル第三王朝はメソポタミア北部の都市と軍事同盟を結んでいない。メソポタミア北部では、錫が流通していたが、各都市は銀と錫の交換レートを定めていなかった。飢饉が勃発した場面で、メソポタミア北部からの穀物輸入が困難であったのは、おそらくそのためである。歴史家の小林登史子氏が、多くの著作を書いておられるので、シュメール文明に関心の高い方は小林氏の著作を読んでいただきたいと思うが、強調したいことがひとつある。アッカド期あるいは「動乱の時代」に、都市が牧場であった時代が終わっている。ウル第三王朝は、古代シュメールを模倣して土地の分与と売買を禁止したが、ウルク市そのものを再現したわけではない。ウルク市は、野生の牛や山羊を閉じ込めて家畜化するために城郭を築いたが、ウル市は外敵の侵入を防ぐために城郭を築いた。ちなみに、ギルガメシュ叙事詩が完成したのはウル第三王朝期である。ギルガメシュがエンメバラゲシの息子を倒し、キシュ市を制圧したとの説話は、おそらくシュメール人がメソポタミア中部の支配者層になったことを流布するための説話である）

ウル第三王朝滅亡後、ふたつの巨大王朝（イシン朝とラルサ朝）といくつかの小王国がメソポタミア中部と南部を約200年支配する。その後小王国のひとつ古バビロニア＝バビロン第一王朝がハンムラビ王（在位紀元前1792～紀元前1750年）の代にメソポタミア中部と南部を統一して支配する（古バビロニアはアムル人の王国である。後のアッシリア人やユダヤ人もアムル人であると論じる考古学者や歴史家もいるが、旧約聖書に登場するアブラハムはハンムラビである、などという評論家等の言説は飛躍しすぎている）。

後のアッシリア帝国が徹底破壊したため、古バビロニアの記録が十分残っていない。したがって、古バビロニアの統治形態は不明である。歴代古バビロニア王は、土地を分与したのか、徴税を実施したのか、がわからない。筆者の想像では、歴代古バビロニア王は、土地を貸し出し、地代を徴収した（コラム7）。

他方、紀元前1900年頃からオリエント各地で種族や部族の移動が活発化する。ハンムラビがメソポタミア中部と南部を統一して支配した頃、レヴァント地方に定住していたセム語族のヒクソスがナイル川下流のデルタ地帯にも定住する。すなわち、異なる種族（セム人とエジプト人）と異なる支配者層がナイル川下流域と中流域、上流域に併存した。だが紀元前1555年、ナイル川中流域の古代都市テーベ（現在のルクソール市）の豪族イアフメネス1世率いる軍勢がナイル川下流域を征服する。その後イアフメネス1世はレヴァント遠征を繰り返し、ヒクソスを滅ぼす。

（歴史家たちは、イアフメネス1世が樹立した王朝を「第18王朝」と呼び、第18王朝後のエジプトを「新王国」と呼んでいる。ちなみに、本書では現在のシリアとレバノン、イスラエル＝パレスチナを合わせて「レヴァント」地方と呼び、とりわけシリアとレバノンを強調する場合「北レヴァント」、イスラエル＝パレスチナを強調する場合「南レヴァント」と呼ぶが、セム人の故郷はレヴァント地方で、ヒクソスはレヴァント地方の先住民である、との説がある。私見であるが、最初に農地の耕作＝農耕をはじめたのはヒクソスである。ヒクソス以前の農業は、不耕起栽培農業であった）

ヒクソスを滅ぼしたエジプト第18王朝は、南レヴァントを征服し、トトメス3世の代に北レヴァントに侵攻する。だが、メソポタミア北部のミタンニが侵攻を阻止する。エジプトとミタンニは戦闘を繰り返した（紀元前1457年のメギドの戦いは、戦死者数を記録した最初の戦いとして有名である）。

エジプトとミタンニの戦闘は、トトメス3世の後を継いだアメンヘテプ2世の代も続いた。だが、次のトトメス4世が婚姻等をテコにして友好関係を築く。エジプトとミタンニの友好関係は、次のアメンヘテプ3世の代も続くが、ヒッタイト人の侵攻に対する備えでもあった。すなわち、軍事同盟である。

紀元前1531年頃、アナトリア半島を含む小アジアを征服したヒッタイト人がメソポタミア中部に侵攻して古バビロニアを滅ぼす。その後ヒッタイト人は小アジアに引き返し、おそらくシュメール人の末裔かアムル人がバビロン第二王朝を開く。そして紀元前1500年頃、東方から侵攻したカッシート人がバビロン第二王朝を滅ぼし、バビロン第三王朝を開く。他方、ミタンニが北レヴァントを征服し、上で述べたが、エジプトとの戦闘を繰り返した（カッシート人の言語は、アッカド語やアムル語とまったく異なる。しかし彼らは約400年、メソポタミア中部と南部を支配する。その間、カッシート人の言語がアムル語に変遷した）。

古バビロニアを滅ぼしたヒッタイトでは、その後内乱と王位簒奪が続いたが、紀元前1400年頃に内乱が終息し、シュッツピルリウマ1世が「ヒッタイト帝国」を再建する。そして紀元前1350年頃、シュッツピルリウマ1世率いるヒッタイト軍が北レヴァントの湾岸都市ウガリットを占領し、その後ミタンニに侵攻して北レヴァントを征服する。北レヴァントを失ったミタンニは、メソポタミア北部の小王国として残るが、支配下のアッシリアが反乱を起こす。紀元前紀元前1300年頃、アッシリアがメソポタミア北部を征服し、ミタンニを併合する。

（エジプトと同盟を結んだミタンニは、海上交易に依存するようになり、有力者や民衆の多くがレヴァント地方に移住した。したがって、北レヴァントを失った場面でミタンニは滅んだともいえる。ちなみに、ヒッタイト人はインド・アーリア語族であるが、ミタンニを建国したフルリ人もインド・アーリア語族である。言語の共通性は平和や友好にあまり役立たない）

ミタンニの同盟国であったエジプトは、ヒッタイトの北レヴァント侵攻を傍観した。歴史家たちは、当時のエジプトはアマルナ改革の真最中で、そのためミタンニに援軍を送ることができなかった、と論じている。

ミタンニとの同盟に尽力したアメンヘテプ3世の死後、アメンヘテプ4世（在位紀元前1353～紀元前1336年）が王位を継承する。そして、ナイル川下流域に新都アマルナを建設し、アテン神が唯一の神で、アテン以外に神はない、と宣言した（これが「アマルナ改革」である。哲学者や社会学者の多くが、アメンヘテプ4世のアテン信仰が一神教のはじまりである、と論じている。しかし筆者は、一神教を発明したのはミタンニとアッシリアである、と考える）。

当時のエジプトは、首都テーベの神アメンが最高神であった。歴史家の山花京子氏によれば、エジプトでは、トトメス4世やアメンヘテプ3世の代からエジプト王＝ファラオとアメン神官の確執がはじまったようだが、アメンヘテプ4世はアテン信仰の下でアメン神官排除を試みる。彼は自身を「アクエンアテン（アテンに仕える者）」と称し、新都アマルナを建設して遷都した。だがアメンヘテプ4世の死後、トゥトアンクアメンの治世下でアメン信仰が復活し、アメン神官が復帰する（余談であるが、トゥトアンクアメンは黄金マスクで有名な「ツタンカーメン」である）。

ところで、当時のエジプトは、ナイル川下流域のデルタ地帯で農耕と開墾が進展し、穀物の生産量が増大していた。そして人口がナイル川中流域と上流域の人口を凌駕していた。エジプト第18王朝は、ナイル川上流域のヌビア地方（概ね現在のスーダン共和国）で金鉱の探索と金鉱石の採掘を推進し、金と穀物の交換を具現する。

金と穀物の交換は、ミタンニでも行われた。ミタンニがエジプトに支払った金の対価は馬、そしておそらくヒッタイトとの交易で得た鉄である。当時の鉄は金より高価であった。ミタンニがエジプトの金を輸入しはじめた頃からアナトリア半島やメソポタミアでも金の流通がはじまるが、銀と穀物の交換が困難であったため、筆者は、金銀交換はほとんど行われなかったと考える。

（当時のオリエント地方で穀物を余分に生産していた地域は、ナイル川下流域のデルタ地帯だけである。おそらく、古バビロニア期に錫が貨幣的役割を喪失し、メソポタミアの「通貨」が銀に一元していた。だが、余剰穀物の少ないメソポタミアでは、銀が土地の対価になる場面があっても穀物の対価になる場面はない。ちなみに、山花京子氏は、著書「エジプトの歴史（慶応義塾大学出版会）」で、「金の価値は銀の二倍ほどだった」と論じている。だが、エジプトは銀を採掘していない。エジプトに銀山がない。筆者は、金と穀物の交換はエジプト支配者層の「強制（平和裏に穀物を獲得するための強制）」で、当時のエジプトやミタンニで金銀交換が行われる場面は稀であった、と考える。エジプトで金銀交換がはじまるのはプトレマイオス朝期である）

トゥトアンクアメンの下でアメン信仰が復活し、アメン神官が復帰したが、それにより民衆がナイル川下流域から中流域や上流域に移動する場面はない。トゥトアンクアメンは首都をアマルナより下流のメンフィスに移す。

アメン信仰は衰退していた。アメン神官たちは、現実を受け入れない既得権者たちであった、といえる。第18王朝最後のエジプト王ホルエムヘブ（在位紀元前1323～紀元前1295年）はアテン信仰を封じたが、他方、エジプトの多神教化を推進し、アメン神官たちの既得権を剥奪する（コラム8）。

ホルエムヘブの死後、ラムセス1世が即位し、エジプト新王国が第18王朝から第19王朝に変遷する。第19王朝は次のセティ1世（在位紀元前1294～紀元前1279年）の代に北レヴァントに侵攻するが、ムワタリ2世率いるヒッタイト軍が反撃する（ちなみに、セティは「セト神の君」という意味である。歴史家たちは、第18王朝から第19王朝に変遷した根拠を最高神の変遷に置いているように思う。最高神の変遷は支配者層の変遷を意味する）。

ホルエムヘブと同時代のヒッタイト王はムルシリ2世である。北レヴァント制圧後、疫病が流行り、ヒッタイトの人口が激減したが、ムルシリ2世はアナトリア半島内外の小王国と軍事同盟を結び、兵員を集めてヒッタイト軍を再建する。ムワタリ2世はムルシリ2世の長男である。ムワタリ2世率いるヒッタイト軍がセティ1世の侵攻を阻止した。

だが、セティ1世の後を継いだラムセス2世（在位紀元前1279～紀元前1212年）が再度北レヴァント侵攻を試みる。紀元前1274年、北レヴァントのオロンテス川一帯でエジプトとヒッタイトの大軍が激突した。ヒッタイト軍はエジプト軍の侵攻を阻止したが、その後ムワタリ2世が停戦を求める。停戦を受け入れたラムセス2世は、負け戦であったにもかかわらず、歴史家たちが「カデシュの戦い」と呼ぶこの戦いの勝利を宣言する。

ラムセス2世は、カデシュの戦い後も北レヴァント侵攻を繰り返したが、戦果は芳しくなかった。他方、メソポタミア北部を支配したアッシリアがレヴァント地方に侵攻しはじめる。紀元前1259年、エジプトとヒッタイトは南レヴァントと北レヴァントの境界を定め（レヴァント地方を現在のイスラエル＝パレスチナとシリアやレバノンに分離し）、不可侵条約と共同防衛条約を締結する。当時のヒッタイト王はムワタリ2世の弟ハットゥシリ3世である。条約締結後、ハットゥシリ3世の娘がラムセス2世に嫁ぐ（コラム9）。

エジプトとヒッタイトの不可侵条約と共同防衛条約は功を奏した。アッシリアの侵攻が、北レヴァントで止まる。だが、ラムセス2世の死後、歴史家たちが「紀元前1200年のカタストロフ」と呼ぶ大変動が勃発する。

紀元前1200年頃、「海の民」がペロポネソス半島やアナトリア半島、レヴァント地方を襲撃してミュケーナイ（ミケーネ）とウガリットを滅ぼす。そして紀元前1190年頃、おそらく干ばつと食糧難、内乱等が原因で、ヒッタイトの古代帝国体制が崩壊する。

（「海の民」のルーツは不明で、襲撃についても諸説が多い。本書では、ドーリア人以前のギリシャ人＝アカイア人と「海の民」に言及しない。「海の民」侵攻後、南レヴァントでイスラエル王国とユダ王国が誕生し、フェニキア人が北レヴァントを支配したが、本書では、イスラエル王国とユダ王国、フェニキア人にも言及しない）

「海の民」はナイル川下流域のデルタ地帯も襲撃するが、エジプト軍が撃退した。その後紀元前1159年にアイスランドのヘクラ山が噴火し、地球が寒冷化する。ヘクラ山噴火後、メソポタミア北部やアナトリア半島で暗黒時代が約200年続き、ドーリア人が侵入したギリシャで400年以上続く。他方、ヒッタイトが占有していた冶金技術＝製鉄技術がオリエント各地に伝わる。すなわち、歴史家たちが「紀元前1200年のカタストロフ」と呼ぶ大変動は、鉄器時代のはじまりである（コラム10）。

ちなみに、メソポタミア中部と南部では、「紀元前1200年のカタストロフ」後もイシン第二王朝＝バビロン第四王朝とエラム王国の抗争が続いた。紀元前1025年、イシン第二王朝は滅ぶが、エラム王国がメソポタミアを征服する場面はない。

コラム7： ハンムラビ法典

有名なハンムラビ法典の碑文が発見された場所はエラム王国の首都スーサである。おそらく、カッシート＝バビロン第三王朝を滅ぼしたエラム王シュトルク・ナフンテが戦利品として持ち帰った。

ところで、著名な歴史家の中田一郎氏は、著書「ハンムラビ王（山川出版）」で、銀の利息は20%、大麦の利息は33．3%との記載がハンムラビ法典にある、と論じておられる。中田氏は他にも多くのことを論じておられるが、銀と大麦の交換については論じていない。ハンムラビ法典に、銀と大麦の交換に関する記載がないからである。古バビロニアで、銀で大麦を買うことはできなかった。

私見であるが、当時のメソポタミアでは、銀は土地の対価で、それ以上の何かではない。銀の利息が20%なのは、土地を5年借りたら同等の土地あるいは同等の銀を返せ、ということである。大麦の利息が33．3%なのは、三粒の大麦籾を借りたら翌年四粒にして返せ、ということである。銀で大麦の利息を返すことはできない。

（古バビロニア期のメソポタミアの農業はおそらく不耕起栽培農業である。作付け可能な土地＝農地は限定的で、また作付けする作物の種類も限定的であった。たとえば、小麦の栽培は絶望的で、かろうじて大麦の栽培が可能であった。したがって、穀物生産量の少ない古バビロニアでは、銀と大麦の交換はできなかったと考えるが、同時代のアッシリア＝古アッシリアは事情が異なる。古アッシリアは商業都市国家で、メソポタミア北部では、アッシリア商人が銀と毛織物や銀と錫を交換していた。そして、レヴァント地方やアナトリア半島で毛織物と小麦や大麦を物々交換していたように思う。しかし王位を簒奪して君臨した古アッシリア王シャムシ・アダド1世の死後、古バビロニアがメソポタミア中部と南部を統一し、おそらく銀と錫の交換を禁止した。本文でも述べたが、古バビロニア期に錫が貨幣的役割を喪失し、古アッシリアは衰退する）

余談であるが、数学者のデイヴィッド・オレルは、著書「貨幣の歴史（原書房）」で、メソポタミアでは銀は神殿に保管され、実際に流通していたのは粘土に数字を記載した「借用書」である、と論じている。だが、彼は銀と錫の交換を論じていない。すなわち、貨幣交換に言及していない。

貨幣＝借用書説は、現代貨幣理論＝MMTを支える仮説でもある。だが、MMT提唱者たちも、貨幣交換に言及しない。たとえば、大澤真幸氏と柴山桂太氏が「表現者クライテリオン（2021年7月号）」でMMTを論じているが、彼らは貨幣交換に言及していない。MMT提唱者たちにとっても、古典経済学者同様、貨幣は「ひとつ」である。

コラム8： 一神教の起源

モーゼ率いる民衆＝ユダヤ人がエジプトから南レヴァントに移動したのはラムセス2世の代である、と論じる歴史家が多い。しかし筆者は、ホルエムヘブの代である、と考える。

ところで、フロイトは、モーゼはアテン神官で、ユダヤ教の起源はアテン信仰である、と論じた。彼の考えに賛同する哲学者や社会学者が意外に多い。そして、アテン信仰が一神教のはじまりである、と論じる場合がある。

だが、アメンヘテプ3世＝アクエンアテンの正妃ネフェルティティはミタンニの王女で、アテン神は彼女がエジプトに持ち込んだミタンニの唯一神ミトラ＝太陽神ミスラである、と論じる歴史家もいる。だとすれば、一神教を発明したのはエジプトではなくミタンニである、といわなければならない。当時の南レヴァントはエジプトの一部で、ミタンニの文化が浸透していた。筆者の憶測であるが、モーゼ率いる民衆＝ユダヤ人が南レヴァントに移動したのはそのためである。

ちなみに、アッシリアも一神教を発明している。筆者は、ユダヤ教の神はミタンニの唯一神ミトラとアッシリアの唯一神アッシュールの習合である、と考える。ユダヤ教の不可解さは、おそらくミトラ信仰とアッシュール信仰が習合して生じた二面性、あるいは二神性にある。

コラム9： アッシリア王国

人類史にアッシリア人が登場するのはウル第三王朝期で、セム語を話すアラム人であった、との説がある。彼らは商人集団であった。彼らはメソポタミア北部の古代都市アッシュールを拠点にしてレヴァント地方とメソポタミア北部、中部や南部の交易を担う。

アッシリア人の神はアッシュール市そのもので、アッシュールの偶像はない。唯一神アッシュールはアッシリアの王でもあった。そしてアッシュールに仕える副王、すなわち人間のアッシリア王が執政と裁判を担う。カッシートとミタンニの支配下にあった頃のアッシリアの政体は共和的であった（ちなみに、エジプトでは王＝ファラオが任命する宰相が執政と裁判を担った）。

歴史家たちは、紀元前2000年頃から紀元前1400年頃までのアッシリアを「古アッシリア」と呼び、アッシュール・ダン2世（在位紀元前934～紀元前912年）の代までのアッシリアを「中アッシリア」、アダド・ニラリ2世（在位紀元前911～紀元前891年）の代からのアッシリアを「新アッシリア」と呼んでいる。本書では、中アッシリアを「アッシリア王国」、新アッシリアを「アッシリア帝国」と呼ぶ。

コラム7で、古アッシリアについて述べたが、中アッシリア＝アッシリア王国はアッシュール・ウバリト1世の代にカッシートとミタンニの支配から脱した。そしてアダド・ニラリ1世の代にミタンニを併合し、メソポタミア北部を支配する。その後トゥクルティ・ニヌルタ1世（在位紀元前1244～紀元前1208年）の代にメソポタミア中部に侵攻し、レヴァント地方にも侵攻した。だがトゥクルティ・ニヌルタ1世の死後、支配地域を大きく縮小する。

アッシリア王国の支配地域縮小と「紀元前1200年のカタストロフ」は無関係ではない。とはいえ、筆者の憶測であるが、メソポタミア北部を支配していたアッシリア王国は比較的早い時期にヒッタイトが占有していた冶金技術＝製鉄技術を獲得したように思う。それが、後の新アッシリア＝アッシリア帝国の建国につながる。

（余談であるが、作家の井沢元彦氏が、著書「逆説の世界史（小学館）」に、「アッシリアの多神教の主なる神バアル」と書いているが、まちがっている。井沢氏は、おそらく旧約聖書を参照して書いたと思うが、バアルはウガリットの神である。バアルの偶像は存在するが、アッシュールの偶像は存在しない）

アッシリア王国が支配地域を大きく縮小した後、エラム王国がメソポタミア中部に侵攻する。そして紀元前1155年、メソポタミア中部と南部を約400年支配したカッシート＝バビロン第三王朝を滅ぼす。だが、エラム王国がメソポタミア中部と南部を征服する場面はない。カッシート滅亡後、イシン第二王朝＝バビロン第四王朝がメソポタミア中部を征服する。

ちなみに、ここでいう「支配」や「征服」は、軍事同盟ネットワークの中心になる、という意味である。軍事同盟ネットワーク＝古代帝国体制を構築しても、中心がなければ、あるいは中心が弱体化すれば、同盟都市間の抗争を抑止できない。

とはいえエラム王国は例外である。エラム王国が他の王国（あるいはスーサ市が他の都市）と軍事同盟を締結する場面はなかった。エラム人はザグロス山脈の誇り高き「山の民」であったように思う。

コラム10： トロイア戦争

ギリシャ神話のトロイア戦争は、ハインリヒ・シュリーマンが発掘した小アジアのイリオス（イオニア地方の古代都市）で「紀元前1200年のカタストロフ」期に勃発した、との説がある。むろん「海の民」の襲撃と無関係ではない。

だが、考古学者のエリック・クラインは、イリオス＝トロイアがマルマラ海とエーゲ海をつなぐダーダネルス海峡の要所である点に着目し、イリオス＝トロイアはミュケーナイとヒッタイトの争奪地であったと指摘している。彼は、ヒッタイト側の資料を引用して、おそらく200年以上、ミュケーナイとヒッタイトがイリオス＝トロイアの支配を争った、と論じている。エリック・クラインの言説に従えば、「海の民」の襲撃はトロイア戦争後の出来事になる（とはいえ、トゥキディデス（紀元前460年～紀元前395年）は、著書「歴史」に、「トロイア戦争の80年後、ドーリア人らがヘラクレスの子孫とともにペロポネソス半島を占領することになった」と記載している。しかしクラインは、トゥキディデスの「歴史」を軽視し、より古い資料を重視している）。

クラインは、著書「トロイア戦争（白水社）」で、「キュプリア」からはじまり「イリアス」、「アイティオピス」、「小イリアス」、「イリオンの陥落」、「帰国譚」、「オデュッセイア」、「テレコノス物語」と続く一連の「叙事詩の環」を解説してトロイア戦争の全貌を考察している。トロイア戦争に関心のある読者は、エリック・クラインの著書を一読してほしい。

トロイア戦争は、人々の記憶に残る大長期戦であったかもしれない。後のマケドニア王アレクサンドロス3世（アレクサンドロス大王）がギリシャ軍の英雄アキレウスの子孫であると称し、古代ローマがトロイア側で生き残ったアイネイアースを始祖にする（余談であるが、モーゼの「出エジプト」に関するエジプト側の資料は皆無である）。ちなみに、アポロニウス（アポローン）はトロイアの神で、疫病の神である。アケメネス朝ペルシャ王キュロス2世がリュディアを支配するまで、アポロニウスは小アジアの神であり続け、その後ギリシャで太陽神ヘリオスと習合する。

2．2　古代中期の出現期と突破期（紀元前13世紀後半～紀元前5世紀後半）

アッシリアが、メソポタミアの暗黒時代を打破した。コラム9で述べたが、アッシリアの神は唯一神アッシュールで、大地の神であり、アッシリアの王でもある。アッシュールに仕える副王（すなわち人間のアッシリア王）が土地の分与を禁止し、征服した地域の住民を他の地域に強制移動する。それにより支配地域を拡大し、古代帝国＝アッシリア帝国を建国した。

すでに述べたが、古代帝国の必要条件は都市間の軍事同盟ネットワークである。十分条件は植民である。だが、エジプトやヒッタイトは植民に無関心であった。すなわち、エジプトやヒッタイトは古代帝国の十分条件を満たしていない。しかしアッシリアは十分条件を満たす。アッシリアが行った強制移動の目的は農耕と開墾の拡大、および植民都市の建設である。メソポタミアとレヴァント地方で種族や部族の分断と混合が300年以上続き、各地に農耕地と植民都市が誕生した。

（植民政策が古代帝国を拡大する。筆者の認識では、後に新バビロニア王ネブカドネザル2世が行ったバビロン捕囚はアッシリア帝国の模倣である。その後アケメネス朝ペルシャが奴隷売買を実施して強制移動をなくし、古代帝国のスキームを刷新する。ちなみに、アッシリアの躍進は紀元前1050～紀元前950年頃からはじまるが、同じ頃、インドで十王戦争が勃発し、アーリア人がカイバル峠を超えてインド北西部のパンジャーブ地方に侵入している。また、中国の王朝が商＝殷から周＝西周に変遷した。だが、十王戦争で鉄製武器が使われた痕跡がない。インドで製鉄がはじまるのは紀元前4世紀以降のマウリヤ朝期で、中国で鉄製武器の使用がはじまるのは呉越戦争が勃発した紀元前430年頃からである。すなわち、ヒッタイトが占有していた冶金技術＝製鉄技術がユーラシア大陸全域に普及するまで約800年の歳月を要した。その後ユーラシア大陸各地で共時性が生じはじめる。本書では、ユーラシア大陸各地の共時性を「同時代性」と呼ぶ）

アッシリア帝国は、ティグラト・ピレセル3世（在位紀元前744～紀元前727年）の代にイラン高原西部や南コーカサス地方を征服し、その後レヴァント地方を征服する。ティグラト・ピレセル3世は、メソポタミア中部と南部も征服した。そしてサルゴン2世（在位紀元前722～紀元前705年）の代に支配体制を再編する。その後アッシュールバニパル（在位紀元前668～紀元前627年）の代にエジプトを征服し、エラム王国の首都スーサを占領する。だが彼の死後、アッシリア帝国は急速に弱体化し、紀元前609年に瓦解する。

ウル第三王朝や古バビロニアとちがい、アッシリア帝国の資料は十分残っている。アッシリア帝国では、唯一神アッシュールに仕える副王、すなわち人間のアッシリア王が有力な将軍に各植民都市の統治を委ね、将軍たちは徴税を実施して毎年一定の金銀や物品貨幣（家畜や穀物）をアッシリア副王に献納した。とはいえ、この献納は「国税」ではない。献納は忠誠の大きさである。アッシリア副王の力が強いときは、将軍たちは献納を増やして忠誠競争に励むが、弱いときは献納を渋る。

アッシリア帝国に「土地」という考えはなかった。したがって、版図という考えもない。私見であるが、「版図」という考えが誕生したのは古代ローマ期である。ちなみに、「アッシュールバニパル」という名称は、「アッシュールの後継者」という意味である。すなわち、アッシュールバニパルは自身を神格化した。彼は「土地」を再現し、掟に反して分与したかもしれない。そして、土地の分与が土地の争奪を引き起こし、アッシリア帝国の崩壊につながったのかもしれない。

アッシリア帝国崩壊後、新バビロニア＝バビロン第11王朝がメソポタミアとレヴァント地方を支配し、エラム王国を滅ぼす。他方、リュディアが小アジア、メディアがイラン高原やコーカサス地方を支配する。だが、ザグロス山脈中腹で誕生したアケメネス朝ペルシャがキュロス2世（在位紀元前559～紀元前529年）の代に小アジアを征服し、イラン高原やコーカサス地方も征服した。その後メソポタミアを征服し、スーサに遷都する。キュロス2世の死後、後を継いだ彼の嫡男カンビュセス2世がレヴァント地方とエジプトを征服する。他方、エーゲ海周辺で古代ギリシャ都市国家が誕生した。

（すでに述べたが、古代帝国の「建国」は、都市間の軍事同盟ネットワークを構築してその中心になる、ということである。キュロス2世は、小アジアを征服した後、リュディア王クロイソスを家臣にし、彼の信仰＝アポロニウス信仰を容認した。おそらく、クロイソスのリュディア王位も承認した。その後クロイソスはアケメネス朝ペルシャ軍に従軍して各地の戦闘で活躍する。キュロス2世は、メディア王アスチュアゲスや新バビロニア王ナボニドゥスの存命と彼らの信仰、そして王位も承認したように思う。そうしなければ、速やかに軍事同盟ネットワークを構築できない。キュロス2世は、バビロン在住ユダヤ人の南レヴァント帰還も認めた。アケメネス朝ペルシャにとって、イベリア半島産の銀を海路で輸送する北レヴァントのファニキア人は厄介な存在であった。キュロス2世がバビロン在住ユダヤ人の帰還を認めた目的は、南レヴァントを彼が考える軍事同盟ネットワークに組み込むことだったのかもしれない。ちなみに、新バビロニア王ナボニドゥスは古代アッカド遺跡の発掘作業を行っている。考古学者や歴史家たちは、ナボニドゥスを「人類最初の考古学者」であると評するが、ナボニドゥスの関心はアッカド王ナラム・シンが銀貨を鋳造したか否かであったように思う。ちなみに、キュロス2世とカンビュセス2世はエラム人で、バビロニアの神々を信仰していた。ゾロアスター教の善神アフラ・マズダーが歴史に大きく登場するのはダレイオス1世の代からである）

ところで、古代ギリシャの歴史家ヘロドトス（紀元前485～紀元前420年）は、著書「ヒストリアイ（歴史）」に最初の硬貨は紀元前670年頃にリュディアが鍛造したエレクトロン貨である、と記述している。だが、リュディアは銀貨も鍛造した。他方、新バビロニアは銀貨を鋳造した（以後、本書では、鍛造も含めて硬貨＝コインの製造を「鋳造」と呼ぶ）。

アッシリア帝国期のメソポタミアでは、物品貨幣（家畜や穀物）の下で商いが行われていた。大地は唯一神アッシュールの身体であり、交換の対象ではない。しかし新バビロニア王は大地を「土地」に置き換える。そして分与する。分与したのは家臣や支配者層、大商人だけであるが、彼らは土地を下賜する場面で銀を上納した。

すなわち、新バビロニア王は自身の支配地域を区切って「土地」に置き換え、売却して銀を蓄えた。おそらく、新バビロニアで銀貨と人間＝奴隷の交換、すなわち古代奴隷制が誕生していた。そして、新バビロニア王は土地より奴隷を欲していたように思う。銀貨と人間＝奴隷の交換が銀の需要を高め、オリエント各地や小アジアで銀鉱の探索と銀鉱石の採掘が進展する（イベリア半島も銀の産地である。フェニキア人がイベリア半島産の銀をレヴァント地方やメソポタミア、ギリシャに持ち込んだ）。

リュディアとメディア、新バビロニアを征服したアケメネス朝ペルシャは支配地域を20の軍管区に分割する。そして各軍管区が毎年一定量の銀をペルシャ王＝諸王の王に献納し、諸王の王が銀貨を鋳造して発行する。おそらく、銀貨は諸王の王（シャーハーンシャー）が兵に与える褒賞であった。しかし銀貨と土地を交換する場面はない。他方、銀貨と人間＝奴隷の交換が増大する。それにより軍事同盟ネットワークの維持と拡大が容易になり、人間を強制移動する場面がなくなる。

（銀貨と物品貨幣の交換は可能であったかもしれないが、あまり行われなかったように思う。なぜなら、農耕が普及した後の古代社会では、農民や奴隷も土地の一部で、人間労働が家畜や穀物のような物品貨幣を生産するからである。ちなみに、各軍管区の長＝サトラップも銀貨を鋳造した。目的は、おそらく奴隷の獲得である）

ヘロドトスは、ダレイオス1世（紀元前522～紀元前486年）の代のアケメネス朝ペルシャで各軍管区が献納した銀の量を著書「ヒストリアイ」に記載している。以下の表（表1）は、筆者が作成した「ヘロドトスの表」である。「地域」の列は筆者の推測であるが、小アジア南東（メソポタミア北部）とエジプト、メソポタミア（メソポタミア中部と南部）はおそらく諸王の王（シャーハーンシャー）の直領地である。また、銀の代わりに砂金を献納した軍管区はヒンドゥー山脈地帯＝ヒンドゥークシュであると考えてほぼまちがいない（ちなみに、1バビロン・タラントンは約34kg、1エウボイア・タラントンは約26kgである）。

表1

	地域	毎年献納する銀、その他の量
1	小アジア北西	銀400バビロン・タレントン
2	小アジア南西	銀500バビロン・タレントン
3	小アジア内陸	銀360バビロン・タレントン
4	小アジア南東	白馬360頭＋銀500バビロン・タレントン
5	レヴァント地方	銀350バビロン・タレントン
6	エジプト	小麦約11トン＋銀700バビロン・タレントン
7	ガンダーラ地方	銀170バビロン・タレントン
8	ペルシャ湾東岸	銀300バビロン・タレントン
9	メソポタミア	宦官500名＋銀1000バビロン・タレントン
10	イラン高原北西	銀450バビロン・タレントン
11	カスピ海南東	銀200バビロン・タレントン
12	バクトリア地方	銀360バビロン・タレントン
13	アルメニア地方	銀400バビロン・タレントン
14	ペルシャ湾西岸	銀600バビロン・タレントン
15	イラン高原南西	銀250バビロン・タレントン
16	イラン高原北東	銀300バビロン・タレントン
17	イラン高原南東	銀400バビロン・タレントン
18	南コーカサス地方	銀200バビロン・タレントン
19	北コーカサス地方	銀300バビロン・タレントン
20	ヒンドゥー山脈地帯	砂金360エウボイア・タレントン

金を採掘して銀を採掘していないエジプトが、金を献納しないで銀を献納している。エジプトが金を献納しなかったのは、ダレイオス1世が要求しなかったからである（ダレイオス1世は金貨＝ダリック金貨を発行したが、おそらく「メダル」である）。エジプトが銀を献納できたのは、ギリシャに穀物を輸出していたからである。ギリシャは独自の銀貨を鋳造してエジプトの穀物と交換した。銀を産出していないエジプトは、ギリシャから得た銀貨を銀に戻し、ダレイオス1世に献納したように思う。

エジプト内では、金と穀物の交換が成立していたが、エジプトとギリシャ間で銀貨と穀物の交換もはじまる。当時のギリシャは、各都市が異なる銀貨を鋳造していた。エジプトは、多種多様な「ギリシャ銀貨」を選別しながら、すなわち銀貨の銀含有量を確認しながら穀物を輸出した。

当時のギリシャで、エジプトの穀物と交換する都合上、銀含有量の異なる銀貨と銀貨の交換が生じた。そして、交換の過程で差益が生じた（ちなみに、プラトンやアリストテレスは銀貨と銀貨の交換を嫌い、「差益」を嫌った）。

ギリシャは、黒海北部沿岸のボスポロス王国からも穀物を輸入していた。対価はオリーブ油や毛織物、大理石、金銀等である。ボスポロス王国は、ギリシャから得た金を装飾等で使い、銀をアケメネス朝ペルシャに支払い、奴隷を獲得したように思う（ボスポロス王国以前に黒海北部沿岸を支配していたスキタイ人も同様であったと考えるが、本書では言及しない）。

古代銀貨は貨幣ではない。家畜や穀物が貨幣である。とはいえ、銀貨と奴隷の交換がはじまり、紀元前500年頃から銀貨と穀物、銀貨と銀貨の交換がはじまる。そして銀貨の特殊貨幣化が進展する。

（物品貨幣の「利息」とは、一粒の麦を借りて翌年二粒にして返す、一頭の子羊を借りて数年後に二頭にして返すといった類の利息ある。自然の循環と再生が物品貨幣の利息を可能にした。しかし、次章で述べるが、中世に「富＝消える自然循環物」と「財＝消えない非自然循環物」が結合して「富財」になり、物品貨幣と金貨や銀貨がクラス＝貨幣クラスを形成する。その後物品貨幣が消滅した場面で利息と差益が結合し、「金利」が誕生する）

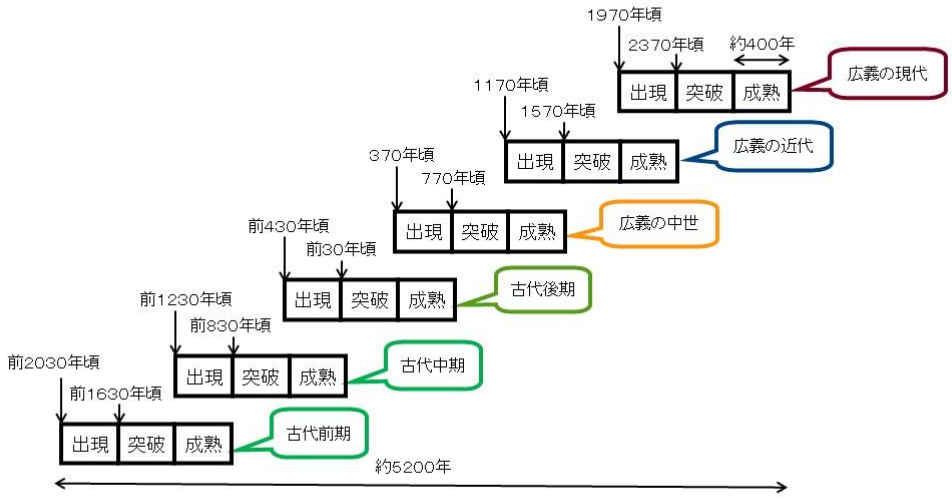
ひょっとして、マケドニア王アレクサンドロス3世（アレクサンドロス大王）の東征目的は、ペルシャから多量の銀を獲得してギリシャ銀貨を一元することだったのかもしれない。紀元前4世紀後半、アレクサンドロス3世はアケメネス朝を滅ぼし、古代ペルシャを支配する。その後各軍管区にギリシャ人植民都市を建設した。しかし、農耕に従事する農民や奴隷がいなければ「土地」ではない。各植民都市は銀貨を鋳造してギリシャに送り、必要な農民や奴隷を獲得した。

各植民都市がローカルな商行為で銀貨を使用する場面はなかった。また、銀貨を徴税する場面もなかった。各植民都市は多量のペルシャ製ギリシャ銀貨を鋳造したかもしれないが、ギリシャから農民や奴隷を得るための手段にすぎなかった。

（アレクサンドロス3世の父ピリッポス2世は、ギリシャ北東部のパンゲオ山で産出する金をギリシャに送り、ギリシャ金貨＝スタテル金貨を鋳造して兵士に与え、マケドニア軍を編成した。アレクサンドロス3世も金貨を発行したが、自身の横顔＝肖像を刻印した「メダル」である。当時、金貨に複雑な刻印を施す技術を有していたのはエジプトで、私見であるが、アレクサンドロス3世はエジプトで金貨を鋳造した。その後エジプトの金貨鋳造技術がギリシャや小アジア、ペルシャやインドに伝播する）

ところで、柄谷行人氏は、著書「世界史の構造（岩波書店）」で、筆者のレベル4パースペクティヴに古代をつないだより大きなパースペクティヴを考案して人類史の変遷を論じている。下図（図5）は柄谷氏のパースペクティヴの抽象である（柄谷氏はS字カーブモデルに言及していない。下図は筆者の想像図であるが、柄谷氏にも満足していただける想像図であると思う）。

図5　レベル4パースペクティヴと古代



柄谷氏は、アケメネス朝ペルシャを重視しておられる。銀と人間を交換するか、人間を強制移動するかのちがいがあるが、アケメネス朝ペルシャの統治形態もアッシリア帝国と同様な地方分権体制である。アケメネス朝ペルシャは、古代帝国の必要条件＝軍事同盟ネットワークと十分条件＝古代奴隷制を重畳して古代帝国を完成した。だが、古代後期の突破期に古代帝国のスキームが変貌する。柄谷氏は、古代ローマもアケメネス朝ペルシャと同様な古代帝国であると認識しておられるようだが、古代ローマは軍事同盟ネットワークを解体して都市の武装を解除し、「国軍」を編成する。ちなみに、「古代前期」はウル第三王朝が滅亡した紀元前2030年頃からはじまり、「古代中期」はトロイア戦争が終結した紀元前1230年頃、あるいは冶金技術＝製鉄技術が拡散した頃からはじまる。そして「古代後期」は、ソクラテスやプラトン、アリストテレスが登場した紀元前430年頃からはじまる。

２．３　古代中期の成熟期と古代後期の出現期（紀元前5世紀後半～紀元前1世紀後半）

アレクサンドロス3世の死後、家臣間に政争が生じ、後継者戦争＝ディアドコイ戦争（紀元前323～紀元前281年）が勃発した。40年以上続いたディアドコイ戦争の結果、アンティゴノス朝がギリシャとマケドニア、プトレマイオス朝がエジプトと南レヴァント、セレウコス朝が小アジアと北レヴァント、およびメソポタミアからインダス川流域までを支配する。

（ディアドコイ戦争下で、アレクサンドロス3世が築いた古代ギリシャ帝国＝ヘレニズム帝国が三分裂したわけだが、アンティゴノス朝もプトレマイオス朝も、セレウコス朝もいわゆる領邦国家ではない。三つの王朝は三つの軍事同盟ネットワークである。しかも、セレウコス朝軍事同盟にはアンティゴノス朝を支持する都市や王国が多数存在した。セレウコス1世がチグリス川東岸に首都セレウキアを建設し、セレウコス朝を開いたが、メソポタミア以東からアム川流域とヒンドゥー山脈地帯、およびインダス川流域までの広い範囲で反乱が多発したため、彼は北レヴァントに新都アンティオキアを建設して遷都する。セレウコス1世の死後、彼の嫡子が即位するが、自身を「アンティゴノス1世」と称し、セレウコス朝を統治した。他方、アム川およびインダス川流域が独立してバクトリア王国を建国する。また、カスピ海南東でアルサケス朝が誕生した）

ところで、アレクサンドロス3世率いるギリシャ軍は、ファニキアを含むレヴァント地方を支配したが、北アフリカに侵攻する場面がなかった。そして、フェニキアが建設した植民都市カルタゴ（現在のチュニジア共和国の首都チュニス付近）が勢力を増大する。

カルタゴが誕生したのは紀元前9世紀頃である。カルタゴは紀元前6紀頃に地中海に進出し、ギリシャとシチリア島の争奪を繰り返した。紀元前480年、カルタゴはヒメラの戦いでギリシャに大敗する。その後カルタゴの政体が共和制に移行するが、紀元前3世紀末頃まで、カルタゴはギリシャとシチリア島の争奪を繰り返し、シチリア島南部を領有する。

紀元前288年、イタリア半島に近いメッシーナ市で傭兵の反乱が勃発し、シチリア島の中心都市シラクサの王ヒエロン2世がカルタゴに援軍を要請した。カルタゴ軍がメッシーナ市を制圧するが、反乱を起こした傭兵たちは新興都市国家ローマに援軍を要請し、ローマ軍がシチリア島に上陸する。ローマ軍はメッシーナを占領し、その後シラクサに侵攻した。紀元前263年、シラクサはローマ軍の軍門に下る。そして翌年、第一次ポエニ戦争が勃発する。

（紀元前338年、イタリア半島の軍事同盟ネットワーク＝ラティウム同盟が消滅し、ローマ市が各都市の軍をローマ軍に編入した。すなわち、ローマ市がイタリア半島各都市の軍をひとつの「ローマ軍」にまとめ、各都市の武装を解除した。以後、ローマ軍が駐屯する各都市の総和を「古代ローマ」と呼ぶが、カルタゴは軍事同盟ネットワークを解体していない。アンティゴノス朝やプトレマイオス朝、セレウコス朝も軍事同盟ネットワークを解体していない。すなわち、軍事同盟ネットワークに加盟する各都市が独自の軍を有し、「戦争の自由」を有する。筆者に、ローマ市がイタリア半島各都市の軍をひとつの「ローマ軍」にまとめた経緯はわからないが、国軍体制の有無が古代ローマとカルタゴや古代ギリシャ帝国＝ヘレニズム帝国の大きなちがいである）

23年続いた第一次ポエニ戦争の経緯は割愛する。第一次ポエニ戦争後、カルタゴはシチリア島を古代ローマに割譲した。古代ローマはシチリア島を属州化し、サルデーニャ島とコルシカ島も属州化する（シチリア島とサルデーニャ島、コルシカ島は穀物の産地である）。その後古代ローマはイベリア半島各都市と同盟を結びはじめる。当時、フェニキアが没落し、カルタゴ船舶がイベリア半島産の銀を輸送していた。古代ローマのイベリア半島進出は、カルタゴの交易を危うくする。紀元前219年、第二次ポエニ戦争が勃発した。

第二次ポエニ戦争は、ハンニバル下のカルタゴ軍が古代ローマと同盟を結んだイベリア半島のサグントゥム市（現在のサグント市）を攻撃したときからはじまる。その後、カルタゴ軍はアルプス山脈を越えてイタリア半島に侵攻した。そして各地の戦闘（紀元前216年のカンナエの戦い等）でローマ軍に大勝する。だが、カルタゴ軍の優勢を見てカルタゴと同盟を結んだ都市は、イタリア半島南西のカプア市とシチリア島のシラクサ市だけであった。他の都市がカルタゴと同盟を結ぶ場面はない。

ハンニバルは、古代ローマも軍事同盟ネットワークで、ローマ市がその中心である、と考えていたように思う。だが、イタリア半島に軍事同盟ネットワークはない。カプア市を除けば、イタリア半島の各都市は独自の軍を有していない。したがって、イタリア半島各都市がカルタゴ軍の優勢を見ても、カルタゴと軍事同盟を結ぶ「戦争の自由」がない。

ハンニバル率いるカルタゴ軍はカプア市で冬営し、その後ローマ市を目指す。だが、ローマ軍が結集してカルタゴ軍を包囲する。他方、別動隊がカプア市とシラクサ市、イベリア半島に侵攻する。経緯は割愛するが、ローマ軍はカプア市とシラクサ市を陥落し、イベリア半島を征服した。紀元前202年、ハンニバルはザマの戦いで惨敗し、第二次ポエニ戦争が終結する。その後古代ローマはイベリア半島を属州化する（シラクサ市が陥落する場面で、高名な数学者アルキメデスが殺害されている）。

カルタゴの敗北を知ったマケドニア王ピリッポス5世が、古代ローマとの戦争を決意する。だが、マケドニア軍はキュノスケファライの戦いでローマ軍に惨敗する。アンティゴノス朝マケドニア王国は、ピリッポス5世の長男ペルセウスの代に滅亡し、その後古代ローマが属州化してギリシャとトラキア（バルカン半島南東部）、小アジアの一部を支配する。

ところで、キュノスケファライの戦いでピリッポス5世率いるマケドニア軍に大勝したローマ軍司令フラミヌスは、各ギリシャ都市の武装を解除したが、他方、自由自治を認めた。その後ギリシャ都市国家カルキス（現在のギリシャ共和国ハルキダ市）がフラミヌスの肖像を刻印した金貨＝スタテル金貨を発行する。カルキス市は、スタテル金貨を10万枚以上発行したと伝えられているが、鋳造で使用した金はおそらくエジプトから入手した金である。プトレマイオス朝が、当時のエジプトを支配していた。

アレクサンドロス3世の死後、40年以上続いたディアドコイ戦争を巧みに勝ち抜いたプトレマイオス1世（在位紀元前305～紀元前282年）がアレクサンドリア市を拠点にしてプトレマイオス朝エジプト王国を開く。彼の後を継いだプトレマイオス2世（在位紀元前285～紀元前246年）が王国の基礎を固め、プトレマイオス3世（在位紀元前246～紀元前222年）がレヴァント遠征を行い、南レヴァントやキプロス島を支配する。その後交易が活発化し、エジプトで金銀交換がはじまる。筆者の認識では、人類史上初の商用金銀交換である。

（人類史上初の商用金銀交換は、おそらく古代ギリシャの銀・銀交換の模倣で、穀物を輸出入する都合上の出来事であったように思う。当時の金は「高価な銀」であった。筆者は、金銀交換が行われた場所はエジプト内だけで、金銀比価は2．0であったと考える。ちなみに、プトレマイオス朝の公用語はギリシャ語で、アレクサンドリア市は「ギリシャ都市」である。アレクサンドリア図書館は40万の巻物を保管し、エウクレイデスやアポロニウス、エラストテネスやアリスタルコスがギリシャの自然学を探求していた。シラクサ市のアルキメデスもアレクサンドリア図書館から多くの知見を得たようである）

プトレマイオス3世の死後、プトレマイオス4世の代にアンティオコス3世（在位紀元前241～紀元前187年）率いるセレウコス軍がエジプトに侵攻する。エジプト軍は、ラファの戦いでセレウコス軍を撃退したが、アンティオコス3世はバクトリア王国やアルサケス朝を制圧した後、再度エジプトに侵攻する。紀元前200年、エジプト軍はパニオンの戦いでセレウコス軍に大敗する。その後セレウコス朝が南レヴァントを支配し、プトレマイオス朝は古代ローマの庇護下に入った。

その後アンティオコス3世は矛先を古代ローマに向ける。目的は古代ローマが属州化したマケドニア王国の奪還である。だが、紀元前190年のマグネシアの戦いでローマ軍に大敗する。アンティオコス3世の死後、セレウコス朝はアンティオコス4世（在位紀元前175～紀元前163年）の代に一時再生するが、彼の死後、衰退する（ちなみに、ザマの戦いで惨敗したハンニバルがセレウコス朝に亡命している。しかし、ハンニバルがセレウコス軍を率いる場面はなかった）。

すでに述べたが、古代帝国は都市間の軍事同盟ネットワークである。アンティゴノス朝もプトレマイオス朝も、セレウコス朝も各都市が独自の軍を有する軍事同盟ネットワークである。軍事同盟ネットワークの下で形成する連合軍は、一度か二度の大敗で崩壊する。だが、ローマ軍は連合軍ではない。国軍＝ローマ軍が一度や二度の大敗で崩壊する場面はない。

東方の憂いがなくなり、イベリア半島を属州化した古代ローマはカルタゴ侵攻を決断する。紀元前149年、第三次ポエニ戦争が勃発し、カルタゴは滅亡した。その後古代ローマは北アフリカ（現在のチュニジア共和国やリビア）を属州化する。

（古代ローマは、属州の武装を認めなかったが、自治を尊重した。すなわち、ローマ市が各属州都市の内政に関与する場面はない。古代ローマは、軍をひとつの「ローマ軍」にしたという点で過去の古代帝国と異なるが、他は同じである。とはいえ、広大な属州の獲得により、支配者階級と被支配者階級に変化が生じた。古代ローマでは、ローマ市民が選挙権を有する民会が高位軍人や高位官職者を選出する。したがって、複数の民会が存在する。たとえば、ローマ軍を指揮して政務を掌握する執政官と、護民官を選出する民会は異なる。他方、元老院が属州を支配する。そして、属州の莫大な富＝穀物等と財＝銀を得て閥族形成する。ポエニ戦争とマケドニア戦争後、富裕層＝元老院貴族階級が力を増大し、他方、属州の財＝銀の下で経済人階級＝騎士階級（エクティス）が誕生する。古代ローマは四つの階級、すなわち閥族を形成する元老院貴族階級と騎士階級、自由農民等ローマ市民階級、そして属州民や奴隷等の被支配者階級を形成した）

属州から流入する富＝穀物等により、ローマ軍を支えてきた自由農民が没落して古代ローマの政体が形骸化する。他方、騎士階級が台頭した。

紀元前133年に護民官に就任したティベリウス・グラックスは、民会で元老院貴族が所有する大規模農場（ラティフンディウム）を没落した自由農民に分配する農地法＝センプロニウス農地法を制定した。しかし彼は殺害された。ティベリウスの死後、元老院は農地法を封印する。その後、紀元前123年にティベリウスの弟ガイウス・グラックスが護民官に就任し、騎士階級を取り込んで農地法の実施や公共土木工事等を民会に提案する。だが、紀元前121年に殺害された。グラックス兄弟の死後、ローマ市民が元老院派＝オプティマテス派と民会派＝ポプラレス派に分裂する。

（ちなみに、当時の古代ローマはセメントを発明している。このセメントは、現代のセメントより多量のカルシウムを含む「良質」なセメントであるようだが、ガイウス・グラックスは、このセメントに着目して公共土木工事を提案し、道路や植民都市の建設を民会に提案した。彼は、没落した自由農民＝無産市民に植民都市を無償提供するつもりでいた）

自由農民の無産市民（プロレータリ）化はローマ軍の編成を困難にした。だが紀元前107年、ポプラレス派のガイウス・マリウスが執政官（コンスル）に就任し、軍制改革を実施してローマ軍を再建する。その後マリウス率いるローマ軍は、北アフリカ西部のヌミディア王国（概ね現在のアルジェリア民主人民共和国）との戦闘で大勝し、北方の遊牧民との戦闘でも大勝する。

歴史家たちは、マリウスが軍制改革を行い、兵士に給与と武器を支給したことを根拠にして、ローマ軍は徴兵制から志願兵制に移行した、と論じる場合がある。だが、ローマ軍は軍制改革以前から兵士に給与を支給している。また、ガイウス・グラックスが武器の供与を提案している。給与と武器の支給は、軍制改革の本質ではない。

軍制改革以前のローマ軍は、一定程度以上の資産を有するローマ市民だけを兵士にしていた。なぜなら、兵士は自前で武器を調達しなければならないからである。だが、無産市民は自前で武器を調達できない。したがって、兵士になることもできない。マリウスは、資産条件を撤廃した。給与と武器の支給は、資産条件を撤廃して無産市民を兵士にする都合上生じたことである。他方、彼は退役した古参兵士の生活を憂慮していた。

マリウスの下で、グラックス兄弟を尊敬する護民官サトゥルニヌスが植民都市建設を推進し、無産市民への穀物無償提供、および農地や住居の無償提供を推進する。退役した古参兵士が植民都市に移住して農耕に従事するようになるが、元老院が

サトゥルニヌスに反発する。迷ったマリウスがサトゥルニヌスを幽閉し、その後サトゥルニヌスはオプティマテス派に殺害された。

（マリウスに、ローマ軍を常備軍化する意思はなかった。彼は戦役を終えた場面でローマ軍を解散する。ローマ軍は以前からそのような「軍」で、解散する場面で兵士が農地等の報酬を得ていた。マリウスは徴兵制を志願兵制に変更したと論じる歴史家は、この単純な事実を認識していないように思う。古代社会は、戦闘員と非戦闘員のちがいはわずかで、兵制の本質が近代の兵制とまるで異なる。古代の兵制は徴兵制ではないし、志願兵制でもない。ただし、傭兵は例外である）

当時の古代ローマは、元老院貴族が属州を支配し、ローマ市が属州の富を占有していた。マリウスの活躍で危機を脱した後、戦役から解放されたローマ市は繁栄するが、他のイタリア半島各都市は繁栄と無縁である。

紀元前９１年、護民官ドルススがイタリア半島各都市のローマ市化（成年男子へのローマ市民権付与と属州の富の分配）を試みる。ドルススは殺害されたが、イタリア半島各都市はローマ市民権獲得を諦めない。紀元前９０年、イタリア半島の内戦＝同盟市戦争が勃発した。

マリウスの副官スッラ（ルキウス・コルネリウス・スッラ）の活躍により、同盟市戦争は概ねローマ市が優勢であったが、ポントス王国の王ミトリダテス６世率いる大軍が小アジアに侵攻しはじめる。紀元前９０年、執政官ルキウス・ユリウス・カエサル（ガイウス・ユリウス・カエサルの叔父）がユリウス市民権法を制定し、イタリア半島各都市にローマ市民権を与えて同盟市戦争を終結する。そして、スッラが執政官に就任し、彼が率いるローマ軍が小アジアに向かう。

スッラが小アジアに向かう場面で騒乱が勃発し、向かった後も騒乱が勃発した。経緯は割愛するが、騒乱はポプラレス派の蜂起である。スッラは、ミトリダテス６世との会戦で大勝した後、イタリア半島でポプラレス派と会戦する。彼はポプラレス派との会戦でも大勝し、その後独裁官（ディクタトル）に就任する。そして、元老院の権限を強化してオプティマテス派を強固にする。他方、元老院議員の定数を倍増して騎士階級の元老院議員就任も可能にする。そして紀元前７８年に死去する。

（スッラは、小アジアから帰還する場面でギリシャのアテネ市やテーベ市で略奪を行い、奪った金銀を兵士に分配した。歴史家たちは、スッラは略奪した金銀を分配してローマ軍兵士を私兵化した、と論じる場合がある。だが、独裁官に就任した後、スッラはユリウス市民権法下でイタリア半島各都市の民衆が得たローマ市民権を剥奪していない。すなわち、軍制改革とユリウス市民権法がイタリア半島全体を「ローマ市化」したが、スッラが「私兵団」を使って新体制を破壊する場面はない。ちなみに、スッラを執政官に選出したのは民会である。民主的な議会が独裁者を選出する場合がある）

ところで、ディアドコイ戦争下で、ミトリダテス１世が黒海東南部沿岸にポントス王国を建国したが、その後ポントス王国は先に述べたミトリダテス６世（在位紀元前１２０～紀元前６３年）の代にボスポロス王国等を併合して巨大化する。また、セレウコス朝アンティオコス３世がマグネシアの戦いで大敗した後、アルタクシアス１世がポントス王国の東にアルメニア王国を建国した。そしてティグラネス２世（在位紀元前９５～紀元前５５年）の代にカスピ海南岸のコーカサス地方を併合し、巨大化する。

他方、バクトリア王国がアム川流域のグレコ・バクトリア王国とインダス川流域のインド・グリーク朝に分裂した。グレコ・バクトリア王エウクラティデス１世がインド・グリーク朝に侵攻して再統一を目指す場面があったが、彼が不在の間にアルサケス朝の王に即位したアルサケス６世がグレコ・バクトリア王国に侵攻する。その後、グレコ・バクトリア王国は衰退し、北方の遊牧民（トハラ人あるいはサカ人）が侵入して滅亡する。インド・グリーク朝は、「ミリンダ王の問い（仏教教理の問答）」で有名なメナンドロス１世の代に最盛期を迎えるが、彼の死後、北方の遊牧民が侵入して滅亡する（コラム１１）。

他方、グレコ・バクトリア王国に侵攻したアルサケス６世は、その後反転してイラン高原に侵攻する。アルサケス６世は、イラン高原を征服し、さらに進軍してメソポタミア南部も支配する。そして、ゾロアスター教に改宗し、「諸王の王」を号して銀貨を鋳造し、第二ペルシャ帝国＝アルサケス朝ペルシャを開国する。そして、紀元前１２３年に即位したアルサケス８世がメソポタミア中部と北部を征服してチグリス川東岸（セレウキア市近郊）に新都クテシフォンを建設した。

（アルサケス６世を「ミトラダテス１世」、アルサケス８世を「ミトラダテス２世」と呼ぶ場合がある。古代アケメネス朝ペルシャで、アルタクセルクセス２世の代に古代シュメールの女神イシュタル（イナンナ）と習合したアナーヒター、ミタンニの唯一神ミトラ＝太陽神ミスラがゾロアスター教の善神アフラ・マズダーと同格化している。アルサケス６世とアルサケス８世の信仰対象はおそらくミトラである。余談であるが、ミトラ＝ミスラは仏教の下で弥勒になり、ヒンドゥー教の下で阿修羅になる）

古代ローマでは、スッラの死後、イベリア半島でセルトリウスの乱が勃発し、イタリア半島内でスパクタクスの乱が勃発した。ポンペイウス率いるローマ軍がセルトリウスの乱を平定し、クラッスス率いるローマ軍がスパルタクスの乱を平定する。他方、ポントス王ミトリダテス６世がアルメニア王国と同盟を結び、大軍を率いて再度小アジアに侵攻する。ルクッルス率いるローマ軍がミトリダテス６世率いるポントス軍に立ち向かう。

ルクッルスは、スッラの下で財務官（クァエストル）を務めていた。そして紀元前７４年に執政官に就任し、その後アナトリア半島西南端のキリキア属州総督に赴任した。ルクッルス率いるローマ軍はポントス軍に大勝し、アルメニア軍にも大勝する。ポントス軍とアルメニア軍に大勝した後、彼は属州の内政と防衛に専念する。だが、ルクッルスは兵士に十分な休養と報酬＝略奪品等を与えなかった。そのため兵士の不満が鬱積したようである。ポントス軍との再戦を憂慮する民会がルクッルスを解任し、東部方面の戦闘をポンペイウスに委ねる。

セルトリウスの乱を平定したポンペイウスは、その後ローマ軍の絶対指揮権（インペリウム）を獲得して地中海の海賊を討伐する。民会がポントス軍との戦闘をポンペイウスに委ねたのは、彼が海賊の本拠地＝キリキア（北レヴァントと接するアナトリア半島の南東ある地域。概ね現在のトルコ共和国アダナ市）を制圧した直後である。ポンペイウスは絶対指揮権を保持したままポントス王国に侵攻する。ポントス軍は大敗し、ミトリダテス６世はボスポロス王国に逃れたが、息子のファルナケスに自害を強

いられる。他方、アルメニア王国がポンペイウスと講和する。
　その後ポンペイウスはアルサケス朝ペルシャと協定を結び、ユーフラテス川を古代ローマとアルサケス朝ペルシャの境界にする。そして北レヴァントを属州化し、南レヴァントを属国化した（ポンペイウスが北レヴァントを属州化した場面で、セレウコス朝が消滅し、南レヴァントに「ユダヤ王国」が誕生する）。
　紀元前61年、ポンペイウスはローマに凱旋する。他方、カエサル（ガイウス・ユリウス・カエサル）が紀元前58年に属州総督に就任してガリア地方（概ね現在のフランスとライン川以西の西ヨーロッパ）に赴く。そして紀元前53年、クラッススら率いるローマ軍がユーフラテス川を越えてメソポタミアに侵攻した。だが、アルサケス朝の貴族スレナスが奮戦してローマ軍を撃退し、クラッススと彼の嫡男が戦死する。

（本書では、カエサルのガリア戦争、およびカエサルとポンペイウス、クラッススの三頭政治に言及しない。クラッススと彼の嫡男の死後、三頭政治が瓦解し、古代ローマとアルサケス朝ペルシャの戦争が約300年続く。この「300年戦争」は概ねローマの侵略戦争であったが、アルサケス朝は疲弊し、サーサーン朝がペルシャ王位を簒奪する。歴史家のシェルドンは、著書「ローマとパルティア（白水社）」で、「ローマが無謀な侵略戦争を繰り返し、その後アルサケス朝より手強いサーサーン朝と争うことになった」と述べている。そして、イラク戦争をはじめたアメリカも古代ローマと同様になるかもしれない、と危惧している。余談であるが、歴史家の山本由美子氏によれば、詩人フェルドウスウィーの著書「シャーナメ（王書）」で登場するペルシャの英雄ロスタムのモデルはスレナスである）

　三頭政治が瓦解した後、カエサル率いるローマ軍とポンペイウス率いるローマ軍の内戦がはじまる（現実には、カエサル率いるローマ国軍とポンペイウス率いるローマ私兵軍団の内戦である）。ポンペイウスは敗退し、紀元前48年にエジプトで死去する。その後カエサルは独裁官（ディクタトル）に就任する。独裁官カエサルの下で、民会が形骸化し、元老院が衰退した。
　作家の塩野七生氏は、著書「ローマ人の物語（新潮文庫）」で、独裁官カエサルがローマ市民権やラテン市民権を乱発したため、民会が形骸化した、と論じている。しかし、民会の開催場所はローマ市である。ローマ市から遠く離れた場所で暮らすローマ市民が、民会が開催されるたびにローマ市まで足を運ぶのは困難である。筆者は、ローマ市民権の乱発等がなくても、民会は形骸化した、と考える。
　他方、塩野氏は、元老院が衰退した原因も同様である、あるいはカエサルが戒厳令発令権等を元老院から奪った点にある、と論じておられる。だが筆者は、元老院が衰退した原因は、カエサルが金貨や銀貨を鋳造する権利を元老院から奪い、自身が金貨や銀貨を鋳造して発行した点にある、と考える。金貨や銀貨を鋳造して発行する者が最初に金貨や銀貨を使用する。この権利は絶大で、支配者あるいは支配者階級の「力」の源泉でもある（とはいえ、カエサルは古代ローマ全域で金貨や銀貨の鋳造と発行を独占したわけではない。彼は属州化したギリシャ都市の金貨や銀貨の鋳造と発行を認めている。すでに述べたが、古代ローマは各都市の武装を認めなかったが、自治を尊重した）。

　紀元前44年、カエサルが殺害された。その後アントニウスが台頭し、カエサルの養子オクタヴィアヌス、最高神祇官レピドゥスと三頭政治体制を再構築する。アントニウスは、カエサルの殺害者たちを討伐した後、ユーフラテス川を越えてメソポタミアに侵攻する。だが、フラーテス4世率いるアルサケス朝ペルシャ軍に大敗した。その後アクティウムの海戦でオクタヴィアヌスに大敗し、エジプトで死去する。凱旋したオクタヴィアヌスは、元老院からアウグストゥスの尊称を得る（コラム12）。

（オクタヴィアヌスは、カエサルの姉の娘が生んだカエサルの甥であるが、カエサルの養子になったのはカエサルの死後である。カエサルは、オクタヴィアヌスを養子にする、と遺言に記載していた。他方、自身の莫大な財産をローマ市民に分配すると記載してもいる。おそらく、カエサルは財産をローマ市民に分配する役割をオクタヴィアヌスに委ねていた。オクタヴィアヌスは、カエサルの遺言を忠実に実行する。そして、この「バラマキ」が、オクタヴィアヌスの人気を高め、アントニウスの台頭を危惧する元老院がオクタヴィアヌスの執政官就任を認める）

　アウグストゥスの尊称を得たオクタヴィアヌスは、アクティウムの海戦前に得た絶対指揮権を手放さなかった。また、元老院も絶対指揮権の放棄を要求しなかった。他方、元老院はアクティウムの海戦下で急増した兵士の処遇をオクタヴィアヌスに委ねる。
　オクタヴィアヌスは、国軍＝ローマ軍を常備軍化する。具体的には、属州を元老院支配下の属州とローマ軍支配下の属州に区分け、ローマ軍支配下の属州を兵士の入植地にする（元老院支配下の属州は、シチリア島やサルデーニャ島、コルシカ島、ギリシャや南フランス、北アフリカ等「安全地帯」で、ローマ軍支配下の属州は、ライン川以西のガリア地方やイベリア半島北西部、アルサケス朝ペルシャと接する北レヴァント等「危険地帯」である）。
　歴史家たちは、古代ローマの帝政はオクタヴィアヌス＝アウグストゥスからはじまった、と論じている。筆者に異論はない。当時の古代ローマは、危険地帯にローマ軍を常駐する必要があった。危険地帯をローマ軍支配下の属州にすることは合理的である。そして、元老院がそれら属州の統治を「皇帝（インペラトル。絶対指揮権者）」に委ねたことも合理的である。国軍＝ローマ軍の常備軍化と危険地帯のローマ軍属州化は帝政の必要条件である。
　だが、十分条件ではない。帝政の安定を維持するには、ローマ軍とローマ軍属州に富財を常時供給する生産拠点が必要である。初代ローマ皇帝アウグストゥスは、エジプトを直領＝皇帝領化し、元老院議員のエジプト往来を禁止した。
　アウグストゥスは、カエサルが元老院から奪った金貨や銀貨を鋳造して発行する権利を手放さなかった。そして、エジプト産の金で金貨を鋳造して発行する（アウグストゥスは、金貨1枚と銀貨25枚が等価であると定めたが、銀貨の重さは金貨の二倍である。したがって、金銀比価は12．5である）。それにより、ローマ軍とローマ軍属州が食糧不足で困る場面がなくなる。アウグストゥスは、司法改革や税制改革を含む様々な政治改革も行ったが、エジプトでは社会実験も行った。すなわち、土地売買

を実施する。

前節で述べたが、アケメネス朝ペルシャは軍管区を制定し、「諸王の王」が各軍管区から毎年一定量の銀を徴収した。とはいえ、各軍管区の長＝サトラップは世襲が多く、毎年一定量の銀を献納すれば他は自由である。すなわち、サトラップが軍管区内の徴税権を有し、彼を中心とする評議会が軍管区内の治安や裁判を担った。銀貨は概ね「諸王の王」が兵士に与える褒賞であり、奴隷を獲得するための手段である。銀と土地の交換は、あまり行われなかった。だが、アルサケス朝期のペルシャで土地売買が活発になる。そして、「諸王の王」から多額の銀貨を得た貴族の力が増大した（アルサケス朝期のペルシャでは、7大貴族の力が絶大で、「諸王の王」以上に強大な貴族もいた）。

私見であるが、アウグストゥスはアルサケス朝ペルシャを模倣した。彼は金貨で兵士に報酬を支払い、退役した兵士が金貨で属州の土地を購入して農耕に従事する仕組みを構築し、無産市民に没落した兵士の自由農民化を試みたように思う。カエサルも同様の考えを持っていた。エジプトでの社会実験からはじまった古代ローマの土地売買は、ローマ軍支配下の属州に波及した。

筆者の認識では、アウグストゥス後の古代ローマ＝帝政ローマで「版図」の考えが誕生した。国軍＝ローマ軍が存在する地域が古代ローマの版図である。とはいえ、国軍の存在は版図の必要条件であるが、十分条件ではない。属州民からの徴税が十分条件である。

（ちなみに、カエサルが死去した紀元前44年の中国は前漢＝西漢の時代で、「中興の祖」と呼ばれた宣帝が紀元前48年に死去している。前漢は、武帝の代に銅貨＝五銖銭を鋳造して発行し、宣帝の死後、後を継いだ元帝が五銖銭を廃止した。その後新を開国した王莽が奇抜な新銅貨を鋳造して発行するなどしたため、経済が混乱する。動乱が勃発し、光武帝が後漢＝東漢を開いて五銖銭が復活した。三国時代、五胡十六国時代や魏普南北朝時代の中国は絹も貨幣の役割を担ったが、主要貨幣は五銖銭である。隋の時代も同様である。だが、唐は高祖の代に新銅貨＝開元通宝を鋳造して発行し、五銖銭を廃止する）

古代ローマは、各地に「版図」化を強制した。南レヴァントで第一次ユダヤ戦争（66～73年）が勃発し、ユダヤ王国が消滅してローマ軍が駐屯するようになる。その後第二次ユダヤ戦争＝バル・コクバの乱（132～135年）が勃発した。第二次ユダヤ戦争後、ハドリアヌス帝がユダヤ教神殿を破壊し、エルサレム市からユダヤ人を追放する。そしてエルサレム市の名称をアエリア・カピトリナに変更し、南レヴァントの呼称が「パレスチナ」になる（北レヴァントの呼称が「シリア」になったのも、おそらくハドリアヌス帝の代である）。

ちなみに、キリスト教を公認したコンスタンティヌス1世の死後、アエリア・カピトリナの名称が「エルサレム」に戻るが、ユダヤ教の聖地ではなく、キリスト教の聖地になる。だが、その後キリスト教会と対立したユリアヌス帝がエルサレムでのユダヤ教神殿の再建を許可し、離散していたユダヤ人がエルサレムに戻る。とはいえ、「版図」の思想が消滅したわけではない。エルサレムに帰還したユダヤ人たちは、ローマの属州民になる（すなわち「納税者」になる）。

コラム11： アショーカ王とカニシカ王、法顕と玄奘

ディアドコイ戦争の頃、北インドでマウリヤ朝が誕生している。マウリヤ朝は第三代王アショーカの代に最盛期を迎えるが、彼の死後、分裂して衰退する。シュンガ朝が北インドを再統一するが、紀元前68年頃にカーンヴァ朝がシュンガ朝を滅ぼす。そして紀元前59年頃、アラビア海沿岸の南西インドとデカン高原を支配するサータヴァーハナ朝がカーンヴァ朝を滅ぼす。

その後クシャーナ朝がアム川流域とインダス川流域、ヒンドゥー山脈地帯を含む北インドを支配した。そしてカニシカ1世（在位144～173年頃）の代に最盛期を迎える。後述するサーサーン朝ペルシャとエフタルがクシャーナ朝を滅ぼすが、その後グプタ朝が北インドを支配する。

古代バラモン教を継承するヒンドゥー教を発明したのはグプタ朝である。インドの二大叙事詩「マハーバーラタ」と「ラーマーヤナ」が完成したのもグプタ朝期である。だが6世紀後半、あるは7世紀初頭、後述するエフタルがグプタ朝を滅ぼす。ハルシャ・ヴァルダナがヴァルダナ朝を開いて北インドを再統一するが、彼の死後、北インドは分裂する。そして「ラージプート時代」と呼ばれる群雄割拠の時代に突入する。

ちなみに、アショーカ王とカニシカ王は仏教を保護したことで有名であるが、仏教を国教化したわけではない。マウリヤ朝もクシャーナ朝も異教に寛容であった。グプタ朝もヴァルダナ朝も同様である。法顕がインドに渡ったのはグプタ朝期で、玄奘がインドに渡ったのはヴァルダナ朝期である。

コラム12： カエサルとクレオパトラ7世のナイル周航

紀元前47年のナイルの戦いでプトレマイオス13世率いるエジプト軍を破ったカエサルは、その後愛人クレオパトラ7世とナイル川を周航した。歴史家たちは、カエサルの周航目的はナイル川の水源探査であった、と論じている。プルタルコスの著書「対比列伝（英雄伝）」等にそのような記述があるからかもしれないが、筆者は、カエサルの周航目的はヌビア地方（概ね現在のスーダン共和国）の金鉱と金鉱石の採掘、および金の精錬と金塊鋳造工程の見学であったと考える。おそらく、カエサルはエジプト産の金と金塊で金貨を鋳造し、兵士に分配するつもりでいた。

その後ローマに凱旋したカエサルは、金貨1枚と銀貨12枚を等価にする。本文で述べたが、銀貨の重さが金貨の二倍であるとすれば、金銀比価は6．0になる。ギリシャの銀・銀交換を模倣して、プトレマイオス3世の代にエジプト王国で商用金銀交換がはじまったが、当時の金銀比価はおそらく2．0である。すなわち、金は「高価な銀」にすぎなかった。その後約200年の間に、金銀比価が3．0に増大したかもしれないが、6．0は大きすぎる。

私見であるが、カエサルは、退役した兵士が金貨で土地を購入して農耕に従事できるようにするために金銀比価を倍増した。アウグストゥスはさらに倍増し、金銀比価を12．5にした。金銀複本位制を発明した後のアッバース朝イスラーム帝国も金銀比価を12．5にしている。コンスタンティヌス1世の代の金銀比価は10．5との説もあるので、アッバース朝イスラーム帝国の「12．5」は偶然の一致かもしれないが、その後近代がはじまるまで、金銀比価に大きな変動が生じていない。

重視すべきことは、貨幣交換は制度であり、貨幣には制度的側面がある、ということである。現代の変動相場制下でも、貨幣は制度的側面を持ち続けている。

中世から近代までの世界史を論じながら貨幣の制度的側面を論じることが本書の執筆目的のひとつであるが、貨幣の制度的側面はきわめて政治的であることを理解していただくために、古代史を概観した。本章にそれ以外の意義はないと考えるが、読者には、物語を楽しむように本章を読んでいただけたと思う。

多くの人が、カエサルとクレオパトラ7世の愛人関係より、アントニウスとクレオパトラ7世の夫婦関係に関心を抱いておられるように思う。だが、クレオパトラ7世にとっても、金銀比価の倍増は疲弊したエジプト王国を復興する上で必要なことであった。作家の塩野七生氏の見解と異なるが、筆者は、クレオパトラ7世は愛国者であったと思う。ヘロデのユダヤ王国を承認したため、アントニウスは受諾しなかったが、彼女は南レヴァントの割譲をアントニウスに強く要求している。クレオパトラ7世は、「エジプト帝国」を再現するつもりでいた（余談であるが、歴代クレオパトラでエジプト語を話せたのは、クレオパトラ7世だけである、との説がある）。

2．4　古代後期の突破期（紀元前1世紀後半～4世紀後半）

ダキア地方（概ね現在のルーマニア）を除けば、五賢帝時代（1世紀末～2世紀後半）の古代ローマは版図をライン川以西のガリア地方とブリタンニア地方（現在のイングランドとフランスのブルターニュ地方）、イベリア半島全域、ドナウ川以南のバルカン半島全域と黒海南西岸、およびクリミア半島沿岸、小アジア全域とユーフラテス川上流以西、レヴァント地方とエジプト、サハラ砂漠以北＝北アフリカ全域に拡大した。

歴史家や社会学者たちは、ローマ市民が住むイタリア半島の各都市を「中心」と呼び、属州民が住む地域を「周辺」、版図外を「外部」と呼んでいる。そして、この「中心－周辺－外部」のスキームを「ローマ帝国」と呼んでいる。だが、この古代ローマのスキーム＝ローマ帝国は3世紀に瓦解する。

212年、ローマ皇帝セウェルスが死去し、彼の長男カラカラ（ルキウス・セプティミウス・バッシアヌス。即位後、マルクス・アウレリウス・アントニヌス・カエサルに改名する）が即位する。即位後、カラカラは勅令＝アントニヌス勅令を発令して奴隷を除くすべての属州民にローマ市民権を与え、国軍＝ローマ軍を巨大化する。

アレクサンドロス3世を信奉していたカラカラは、大軍の力で版図外の富財を略奪し、新生ローマ帝国の建設を目指した。だが、アレクサンドロス3世とちがい、カラカラは姑息であった。カラカラはオスロエネ王国の王を騙し、メソポタミア北部を属州化する。同じ手口でアルメニア王国の王族も騙し、南コーカサス地方を属州化しようとする。しかしアルメニアの民衆が反発した。カラカラは、ローマ軍を派兵してアルメニアの属州化を強行するが、ローマ軍は敗退する（カラカラに騙されたオスロエネ王アブガル9世はキリスト教に帰依していた。また、キリスト教を国教化した最初の王国はアルメニア王国である）。

にもかかわらず、その後カラカラ率いるローマ軍がアルサケス朝ペルシャ領に侵攻する。戦闘は216年にはじまったが、翌年、カラカラは部下に殺害された。218年、古代ローマはアルサケス朝ペルシャと和睦する。しかし224年、サーサーン朝がローマ軍との戦いで疲弊したアルサケス朝からペルシャ王位を簒奪した。そして初代サーサーン朝ペルシャ王アルダシール1世の死後、彼の息子シャープール1世（在位241～272年）が「諸王の王」に即位して古代ローマとの戦闘を再開する。

（サーサーン朝は、版図内の銀貨鋳造施設を支配し、銀貨の発行を独占して各軍管区を支配する。そのための「道具」として、ゾロアスター教を国教化した。さらにゾロアスター教の下で各地の土着信仰を糾合し、慣習法を統合する。すなわち、ゾロアスター教を「諸法の法」あるいは最高法規化して中央集権体制を構築する。そして、司祭が官僚＝神官になり、裁判を担う。おそらく、徴税と銀貨鋳造施設の経営も神官が担った。すなわち、サーサーン朝はゾロアスター教会＝国教会を統治機構化する。他方、神官が戦場に赴く場面をなくす。第三ペルシャ帝国＝サーサーン朝ペルシャは、政体を軍政と民政に分離し、武官と神官＝文官を統合する唯一の存在として「諸王の王」が君臨する帝国になる。本書では、国教＝最高法規を制定して慣習法を束ね、国教会を統治機構化した中央集権型帝国を「中世帝国」と呼ぶ。中世帝国の必要条件は国教と国教会であるが、十分条件は軍政と民政を分離し、武官と文官が同じ中心（皇帝あるいは「諸王の王」）を共有する体制である。サーサーン朝より少し遅れて、インドのグプタ朝もヒンドゥー教を国教化し、神官＝バラモン僧に各地の統治を委ねている）

259年、シャープール1世率いるサーサーン朝ペルシャ軍がエデッサの戦いで当時のローマ皇帝ウァレリアヌスを捕縛し、首都クテシフォンに連行した。その後古代ローマで「3世紀の危機」が勃発する。260年、ガリア地方とブリタンニア地方、イベリア半島が独立してガリア帝国を建国した。さらにサーサーン朝ペルシャ軍の侵攻を阻止していたローマ軍東方司令オダエナトゥスの死後、彼の妻ゼノビアが小アジア東部とレヴァント地方、エジプトを支配してパルミラ王国を建国する。古代ローマは三つに分裂した。

273年、ローマ皇帝アウレリアヌス率いるローマ軍がパルミラ軍を撃退してゼノビアを捕縛する。翌274年、ガリア帝国が自壊し、古代ローマは「3世紀の危機」を脱した。古代ローマは版図を復元するが、古代帝国のスキームは再現しなかった。すなわち、アントニヌス勅令下でローマ市民権を得た属州民がローマ市民権を手離す場面はなかった。その後約100年かけて、古代ローマは中世帝国に変貌する。以後、本書では、古代ローマを「ローマ」と呼ぶ。

（3世紀のペルシャで、サーサーン朝がアルサケス朝から王位を簒奪し、他方、ローマが三つに分裂した。中国やインド、メソアメリカでも同様な危機が勃発している。2世紀後半の中国で黄巾の乱が勃発し、その後三国時代がはじまる。2世紀後半から3世紀後半までの約100年で、中国の人口が約10分の1に減少した。また、3世紀前半のインドで北方のアーリア人がサータヴァーハナ朝（アーンドラ朝）を滅ぼし、その後グプタ朝が北インド、チャールキヤ朝がデカン高原とアラビア海沿岸の南西インドを支配する。そして4世紀初頭のメソアメリカでマヤ文明に大きな変化が生じた（日本でも「倭国大乱」が勃発している）。2世紀後半から3世紀後半に、地球規模の気候変動が勃発している。それが、世界各地で「3世紀のグレート・リセット」が生じた原因かもしれない。「3世紀のグレート・リセット」後、4世紀後半に新たなスキームの帝国＝中世帝国が誕生する）

メソポタミア全域を支配したサーサーン朝ペルシャ王シャープール1世は、さらなる版図の拡大を目指す。ペルシャ軍は西方でローマ軍と交戦し、東方でクシャーン軍と交戦した。精強なクシャーン軍に苦戦したシャープール1世は、中央アジアの遊牧民エフタルと同盟を結び、挟撃する。

サーサーン朝ペルシャは、ホラーサーン地方（現在のイラン北東部とアフガニスタン北西部、トルクメニスタン南西部）を占領し、エフタルはクシャーン朝を滅ぼしてバクトリア地方とガンダーラ地方（アム川流域とインダス川流域、ヒンドゥー山脈地帯）を占領した。だが、その後エフタルはサーサーン朝ペルシャに敵対する。エフタルは北インドのグプタ朝とも敵対した。

他方、ローマでは284年に即位したディオクレティアヌス（在位284～305年）が軍政を東西分割し、北方の守備と北アフリカの統治を共同皇帝マクシミアヌスに委ね、サーサーン朝ペルシャと対峙する。297年、副帝ガレリウス率いるローマ軍がペルシャ軍を破り、メソポタミア北部と中部を奪取してアルメニア王国を解放した。その後ディオクレティアヌスが和議を成立させ、有利な条件で境界を定める。

サーサーン朝ペルシャの動向を抑止した後、ディオクレティアヌスは軍政と民政を分離し、民政を中央集権化する。そして人頭税を制定した。以後、ローマの税収がもっぱら人頭税になる。

（カラカラが発令したアントニヌス勅令により、属州民の大多数がローマ市民になる。そのため属州民の納税＝農税が消滅した。人頭税は農税の代替であるが、筆者の認識では、最初の「国税」でもある。国税＝人頭税を徴税するには、民政と軍政の分離、および民政の中央集権化が不可欠であったように思う。あるいは、ローマの中世帝国化が不可避であった）

ところで、カラカラは銀含有量を大幅に削減した新ローマ銀貨を発行したが、カラカラの死後、ローマ銀貨の銀含有量はさらに低減し、事実上の銅貨になっていた。ディオクレティアヌスが皇帝に即位した頃のローマは、銀貨と土地や奴隷の交換ができなくなっていたかもしれない。ローマもサーサーン朝ペルシャも、物品貨幣（家畜や穀物）が「貨幣」である。銀貨の特殊貨幣化は進展していたが、銀貨と穀物等物品貨幣を交換する場面はあまりなかったし、その必要もなかった。したがって、銀貨と土地や奴隷の交換ができなくなっていたとすれば、銀貨の価値は小さい。

ディオクレティアヌスは、銀含有量100パーセントの新銀貨を鋳造して発行し、銀貨の制度的信用を回復しようとする。彼は銀貨で国税＝人頭税を徴税した。すなわち、徴税を物納から金納に変更した。だが、版図内の銀山が枯渇していたため、多量の新銀貨を鋳造できなかった。新銀貨の発行量は不十分で、ディオクレティアヌスの金融財政改革は破綻する。

ディオクレティアヌス退位後、内戦が勃発した。内戦を征圧して即位したコンスタンティヌス1世（在位306～312年）は新ローマ金貨＝ソリドゥス金貨を鋳造して発行し、新都コンスタンティノープルを建設してキリスト教を公認する。

（現在のイスタンブル市がコンスタンティノープル市である。古代ギリシャの都市国家メガラがマルマラ海西岸に植民都市ビュザンティオンを建設したが、コンスタンティヌス1世がローマ都市に改造して命名した。ちなみに、黒海とマルマラ海をつなぐ海峡がボスポラス海峡で、マルマラ海とエーゲ海をつなぐ海峡がダーダネルス海峡である。マルマラ海の面積は瀬戸内海の半分程度である）

当時のローマは、版図内で金銀交換を具現していたが、銀山が枯渇したため、版図外との金銀交換を具現する必要が生じていた。すなわち、サーサーン朝ペルシャと金銀交換を行う必要が生じていた。

サーサーン朝ペルシャにとっても、ローマとの金銀交換は望むところであった。金を産出するヒンドゥー山脈地帯はサーサーン朝ペルシャの版図外である。すなわち、サーサーン朝ペルシャは銀山を保有していたが、金山を保有していない。しかし、インドや中国の物産（綿織物や絹織物等）を得る場面で金が必要な場面がおそらくあった。

だが、ローマとサーサーン朝ペルシャは敵対している。敵対関係を超越して金銀交換を具現するには、敵対関係を超越する法制度が必要である。ゾロアスター教を国教＝最高法規化したサーサーン朝ペルシャは、必要な法制度を整えていた。だが、ローマに国教＝最高法規はない。コンスタンティヌス1世は、キリスト教を公認したが、キリスト教を国教化したわけではない（コンスタンティヌス1世は、キリスト教に改宗したが、宗派は三位一体説を否定するアリウス派である。ちなみに、コンスタンティヌス1世がアリウス派キリスト教に改宗した後、彼を支えたゴート人もアリウス派キリスト教に改宗した）。

とはいえ、当時のキリスト教の中心地は北レヴァントのアンティオキア市で、しかも301年にキリスト教を国教化したアルメニア王国がサーサーン朝ペルシャと良好な関係を築いている。私見であるが、アルメニア王国でキリスト教会とゾロアスター教会が新ローマ金貨とペルシャ銀貨を交換した。「交換」は、等価交換に準拠する等比交換であったと考える。

361年、コンスタンティヌス朝最後の皇帝ユリアヌスが即位する。ユリアヌスは華奢を嫌い、アリウス派キリスト教会と対立した。彼は、すべての信仰が平等でなければならないと考え、三位一体説を主張するアタナシウス派キリスト教会のコンスタンティノープル帰還や、エルサレムでのユダヤ教神殿建設を認める。そして減税を実施し、形骸化した元老院を再生して古代ギリシャ文化の再生を試みる。だが、ペルシャ戦役で戦死する。ユリアヌスの死後、ローマ軍はサーサーン朝ペルシャにメソポタミア中部を割譲し、和睦した。ちなみに、ユリアヌス率いるローマ軍の侵攻を阻止したサーサーン朝ペルシャ王シャープール2世（在位309～379年）は、その後ゾロアスター教の経典アヴェスターを編纂している。

ユリアヌスの死後、364年に即位したローマ皇帝ウァレンティニアヌス1世は、ローマを東西分割して「東ローマ」の統治と防衛を副帝ウァレンスに委ねる。そして「西ローマ」の統治と防衛に専念する。彼はライン川西岸のマインツ市をアレマン人から守り、またブリタンニア地方や北アフリカの反乱を鎮圧した。その後ドナウ川南岸のパンノニア地方をクァディ人やサルマティア人から守り、375年に死去する。

ウァレンティニアヌス1世の死後、彼の長男グラティアヌス（在位367～383年）がガリア地方で正帝に即位する。他方、副帝ウァレンスがドナウ川を越えてローマの版図内に侵入するゴート人に対峙した。しかし378年のアドリアノープル（ハドリアノポリス。現在のエディルネ市）の戦いで戦死する。

アドリアノープルの戦いには釈然としない部分がある。ウァレンスは、ゴート人がドナウ川を越えてローマ版図内に入ることを許可している。定住先として、トラキア地方北部＝ギリシャ北東部を指定してもいた。歴史家たちは、ローマ版図内に入るゴート人が予想外に多く、配給する食料が不足してゴート人が略奪をはじめたため、ウァレンスはやむなくローマ軍を率いて暴動を鎮圧しようとしたが、アドリアノープルの戦いで戦死した、と論じる場合が多い。だが、アドリアノープルの戦いは、ゲリラ戦ではない。陣形を組んだ正規軍同士の野戦であった。現実に、ローマ軍兵士の約3分の2が戦死している（コラム13）。

ウァレンスの死後、正帝グラティアヌスはテオドシウス1世（在位375～395年）を副帝に指名し、東ローマの統治と防衛を委ねる。テオドシウス1世は、トラキア地方北部を割譲してゴート人の略奪を制止し、サーサーン朝ペルシャ王シャープール2世と平和条約を結んだ。平和条約の下で、アルメニア王国を介することなくローマとペルシャの直接的な金銀交換がはじまる。そしてローマ金貨とローマの物品貨幣が「貨幣クラス」を形成し、ペルシャ銀貨とペルシャの物品貨幣がもうひとつの貨幣クラスを形成する。金貨と銀貨の交換関係が金貨クラスと銀貨クラスの交換関係（数学的には要素間の全単射が可能な真クラスと真クラスの関係）に進展し、経済空間に順序構造＝貨幣経済を形成して物品貨幣の交換を容易にした。

他方、テオドシウス1世はコンスタンティノープルからアリウス派キリスト教会を追放し、古代オリンピックを廃止して異端と異教を排除する。テオドシウス1世の代に、アタナシウス派キリスト教がローマの国教になる。そして、ローマも国教＝アタナシウス派キリスト教の下で慣習法＝ローマ法を統合し、国教会＝アタナシウス派キリスト教会（以後、たんに「キリスト教会」と呼ぶ）が裁判を担うようになる。その後聖職者数が増大し、キリスト教会が統治機構化した（コラム14）。

国教会＝アタナシウス派キリスト教会は金融＝両替も営んだ。国教会の下で、金貨や銀貨が財貨＝制度になり、財貨が土地や奴隷を財産化して土地売買や奴隷売買に関与する人々が増大する。国教会も土地売買や奴隷売買に関与した。そして「荘園」が誕生する。他方、財貨を保有する富豪が財産を求め、土地売買や奴隷売買に関与するようになる。4世紀後半から、ローマの荘園数が増大しはじめる。

（共同体と共同体の交換関係と帝国と帝国の交換関係はちがう。共同体間、あるいは市場間の交換関係は商品交換であるが、帝国間の交換関係は貨幣交換である。筆者は、ローマ金貨とペルシャ銀貨を交換する場面で差益は生じなかったと考える。そして、差益をなくしたことが貨幣経済の形成につながる。貨幣経済の下では、どれだけ有用な事物あっても、物品貨幣化して貨幣クラスのメンバにならない限り、その事物は交換の対象にならない。他方、売り手と買い手の関係は対称で、対称性の持続が商人の信用になる。おそらく、当時のローマ商人やペルシャ商人は帝国間の交換に従事しながら共同体間の交換で利を得ていた。ちなみに、現在の為替差益は貨幣クラス間の差益ではない。為替差益は銀行間取引の下で金利が貨幣の道具的側面＝資本的使用価値を担いはじめたときに生じた差益で、起点は18世紀である。金利と表裏関係にあるため、為替差益を金利と同じものであるかのように論じる経済学者やエコノミストもいるが、資本主義経済下では、為替は貨幣の商品的側面＝商品的交換価値に依存し、金利は貨幣の道具的側面＝資本的使用価値に依存する。為替差益と金利が表裏関係にあるとしても、ちがいは大きい。貨幣は古くから存在した。そのため、歴史家が、古代や中世に遡行して為替差益と金利を同じものであるかのように論じる場合がある。だが、古代や中世の貨幣に資本的使用価値はない。歴史家の言説が、経済学者やエコノミストの言説と同じであっても、論じる時代が異なる。「広義の中世」の突破期に国教会が金利をなくす場面もあった）

ところで、三国時代後の中国を統一した西晋が八王の乱（291～306年）と永嘉の乱（307～312年）の下で滅び、その後中国華北部は五胡十六国時代に突入するが、他方、西晋の皇族のひとり（司馬睿）が江南に逃れ、建康（現在の南京市）で東晋を開いている。383年、華北を統一した前秦の苻堅が大軍を率いて長江を越え、江南に侵攻した。しかし淝水の戦いで謝玄率いる東晋軍に大敗する。

ユーラシア大陸東西の同時代性を重視する歴史家たちが、同時期に勃発したアドリアノープルの戦いと淝水の戦いを世界史の節目であると論じ、アドリアノープルの戦いで遊牧民側＝ゴート人が勝利し、淝水の戦いで農耕民側＝東晋が勝利したことがその後のユーラシア大陸東西のちがいをつくった、と論じる場合がある。しかし、ゴート人は蛮族ではない。ゴート人はアドリアノープルの戦い以前にキリスト教に改宗していた。また、前秦は遊牧民国家ではない。苻堅は、出自がチベット系遊牧民の氐族であったが、読書を好み、学府＝大学を設立している。そして、王猛のような優れた漢人を宰相にし、荒廃した農地の復興、および儒教や仏教の下での種族や部族の融合に努めた。ちなみに、北魏の初代皇帝＝拓跋珪は苻堅が設立した大学で学んでいる（コラム15）。

他方、ピーター・ブラウンのような歴史家が、ふたつの戦いより文化の変化等を重視して、4世紀後半から8世紀後半までを「古代末期」と呼び、約400年間の同時代性を論じる場合がある。筆者のレベル4パースペクティヴにしたがえば、370年頃から古代後期の成熟期がはじまり、「広義の中世」の出現期が重畳する。筆者の考えは、ピーター・ブラウンの考えに近いが、とはいえ筆者が重視するのは文化ではない。経済である。すなわち、貨幣経済のはじまりとその後の400年である（コラム16）。

中国では、前漢の武帝の代から自由農民の没落がはじまる。そして土地を所有する貴族階級が台頭する。三国時代と西晋時代の動乱で貴族階級は没落するが、江南の地で再起する。華北から移住した貴族階級が江南の先住民を討伐した。彼らは討伐した先住民に奴隷労働を強制して農業土木事業を行い、農耕を営む。すなわち、「荘園」をつくった。

347年、桓温率いる軍勢が益州（現在の四川省）を征服し、東晋の版図を三国時代の呉と蜀を合わせた領域に広げる。そして356年、洛陽を奪還する。だが、東晋朝廷は洛陽への帰還を拒む。383年、上で述べた淝水の戦いが勃発した。淝水の戦い後、前秦で内乱が勃発する。394年、前秦が滅び、その後北魏の大武帝が439年に華北を統一するまで、すなわち魏晋南北朝時代がはじまるまで、華北で動乱が続いた。

淝水の戦い後、東晋でも孫恩・盧循の乱が勃発した。420年、東晋が滅び、劉裕が宋朝を開く。劉裕は宋を開国する前に洛陽と長安を奪還している。だが、劉裕が朝廷を建康から洛陽や長安に移す場面はない。劉裕の死後、文帝（劉裕の三男。在位424～453年）が即位する。文帝の代の宋は「元嘉の治」と呼ばれ、江南の地は繁栄した。そして貨幣経済がはじまる。

ユーラシア大陸西部で、ローマとサーサーン朝ペルシャの間で貨幣経済が誕生した。同じ頃、ユーラシア大陸東部で北魏と宋の間で貨幣経済が誕生する。北魏の財貨は絹、宋の財貨は銅貨である。ユーラシア大陸東西の貨幣経済誕生に同時代性がある。筆者は、ふたつの戦い（アドリアノープルの戦いと淝水の戦い）よりローマとサーサーン朝ペルシャ、および北魏と宋の関係に同時代性があると考えたい。

（ふたつの中世帝国の存在が、貨幣経済が生成する必要条件である。そして、ふたつの財貨の存在が、貨幣経済が生成する十分条件である。ユーラシア大陸西部にローマとサーサーン朝ペルシャが存在した。同時代のユーラシア大陸東部＝中国に北魏と宋が存在した。ローマの財貨は金貨、サーサーン朝ペルシャの財貨は銀貨である。北魏の財貨は絹で、宋の財貨は銅貨である）

コラム13： 同盟部族（フォエデラティ）

フン人（フン族）がヨーロッパ史に登場するのは4世紀後半である。フン人はサルマタイ人の末裔＝アラン人の一部を吸収して現在のウクライナを占領した。その後西方に移動する。フン人に追われたゴート人がローマ版図内に侵入したともいえるが、とはいえアドリアノープルの戦いから「ゲルマン人」の大移動がはじまったという従来の言説に反発する歴史家が多い。

コンスタンティヌス1世の頃から、ローマ軍は版図外の部族を活用しはじめている。ユリアヌスは、版図外の部族を積極的に活用した。アドリアノープルの戦い以前から、「ゲルマン人」がローマの同盟部族（フォエデラティ）になり、東西ローマの版図内で暮らしているのである。ゴート人も同盟部族であった。

アドリアノープルの戦いは、アリウス派キリスト教徒のゴート人とアタナシウス派キリスト教徒のローマ人の戦いであった可能性がある。ウァレンスは、アリウス派キリスト教徒であったが、当時の東西ローマでアタナシウス派キリスト教が台頭している。アドリアノープルの戦い後、アタナシウス派キリスト教会の排他性が強くなる。

ちなみに、フン人＝北匈奴説を提唱する歴史家もいるが、匈奴が北匈奴と南匈奴に分裂したのは1世紀中頃である。300年以上の空白があるため、フン人が北匈奴であったか否かはわからない。また、エフタル（フーナ）がフン人であったか否かもわからない。

コラム14： アレクサンドリアの悲劇、その他

391年、テオドシウス1世は異教徒の祭典であるとの理由で古代オリンピックを廃止し、アレクサンドリア教会に異教の神殿や施設を破壊する許可を与える。そして415年、キリスト教徒たちがアレクサンドリア博物館(ムセイオン)やアレクサンドリア図書館を破壊し、アカデメイア・アレクサンドリア分校の校長を務めていたヒュパティアを惨殺した。

（ヒュパティアは新プラトン主義の哲学者で、優秀な女性科学者であったらしい。彼女はアストロラーベ＝天体観測儀やハイドロスコープを発明したといわれている。ちなみに、キリスト教徒たちを扇動したアレクサンドリア教会総主教キュリロスは、その後聖人に列せられている）

とはいえ、アレクサンドリアのキリスト教徒たちが暴徒化した原因はキリスト教そのものにあったわけではない。原因はキリスト教が国教化したことにある。サーサーン朝ペルシャでも、国教化したゾロアスター教が暴走している。たとえば、祭司長のカルティールは、異端者＝ズルワーン主義ゾロアスター教徒を弾圧し、多数のキリスト教徒やユダヤ教徒、仏教徒やマニ教徒を処刑している（アルサケス朝の歴代ペルシャ王は、敬虔なゾロアスター教徒であったが、異端や異教に寛容であった。中国で最初に仏典を漢訳したのは外来僧の安世高であるが、僧侶になる前の安世高はアルサケス朝の皇太子である。彼は出家してインドで修行を積み、後漢時代の中国に渡った）。

ところで、アレクサンドロス3世率いるマケドニア軍が東征する約半世紀前の古代アケメネス朝ペルシャで、アルファベット＝アラム文字が普及し、話し言葉と書き言葉がひとつになる。識字率がどうあれ、知識人や文化人は文字を学ぶ。したがって、言文一致は政治に影響を及ぼし、宗教にも影響を及ぼすが、伝統的な信仰＝ゾロアスター教等の祭儀や経典を古語から口語に改めるのは容易でない。しかし、外来信仰＝仏教等の祭儀や経典は口語に翻訳するしかない。また、新信仰＝ミトラ教等の祭儀や経典も口語になる。

その後、アルサケス朝ペルシャで外来信仰と新信仰が広まり、紀元前2～1世紀頃のレヴァント地方やエジプトで外来信仰が広まる。そして1～2世紀頃に新信仰が広まる。その典型がキリスト教である。新約聖書はギリシャ語の巻物＝書物である。そして、旧約聖書より先に編纂されている。

（キリスト教がユダヤ教から派生したとの認識は、大きな誤認かもしれない。キリスト教は、仏教から派生した可能性がある。パール・バック女史の父アブサローム・サイデンストリッカーが、原始キリスト教は仏教の一派であった、と論じている）

しかし、同時代の中国（魏普南北朝時代の中国）でも仏教が国教化し、北朝と南朝の間で貨幣経済が誕生したが、中国の仏教徒が暴徒化する場面はない。中国の国教は仏教であったが、儒教や道教も国教であった。すなわち、中国では国教が一元していない。したがって国教が最高法規化してもいない。

中国の中世帝国は概ね遊牧民の征服王朝である。したがって、帝国の支配体制が農耕民支配体制と遊牧民支配体制が混在する体制になる。中国が国教を一元および最高法規化できなかったのはそのためである。帝国の両面性、あるいは両義性を束ねる唯一の存在が皇帝であった。

国教の儒教一元を試みる皇帝もいたが、成功していない。たとえば、北魏は太武帝の代に宰相の崔浩が提言して廃仏を断行した。だが、太武帝の死後、仏教が復興する。仏教復興の中心人物であった曇曜は「皇帝即如来」を唱えた。また同時代の南朝では、梁の武帝が「皇帝菩薩」などと呼ばれたりしている。「皇帝即如来」も「皇帝菩薩」も滑稽というしかないが、信仰が国教化すると暴力だけでなくそのような滑稽も信心になる。

中国では、北宋期に遼＝契丹が身分制＝封建制を発明し、農耕民支配と遊牧民支配がようやく一体化する。そして南宋期に儒教と道教、仏教が一体化し、明朝期に国教が一元して最高法規化する。とはいえ、この「遅れ」は後進性を意味しない。北宋期や南宋期の中国の鉱工業生産量はヨーロッパやイスラーム圏を凌駕していた。農産物の生産量もヨーロッパやイスラーム圏を凌駕していた。識字率も中国のほうが高かったと思う。

また、隋唐時代の中国は「律令」と「格式」を制定している。歴史家たちは、律は刑法で令は行政法や民法、格は臨時法で式は細則である、と論じている。だが、隋唐時代の律令と格式は、現存する文書が少ないため、内容が不明である。筆者は、隋唐時代の律令は最高法規の代替で、格式は慣習法体系であった、と考える。

4世紀後半以降に国教が誕生し、最高法規が誕生した。筆者は、そのような認識の下で本書を書き進めるが、国教＝最高法規が存在しなくても、支配者の財貨鋳造と発行を正当化し、支配者層の地位を保障して慣習法を束ねる上位法があれば中世帝国である。隋唐時代の中国は、そのような「中世帝国」であったかもしれない。

ちなみに、慣習法はいわゆる「国法」ではない。国教＝最高法規が慣習法を束ねる統治体制は、法治主義体制ではない。文治主義体制である。法治主義の下で「国法」が誕生したのは9世紀末（西ヨーロッパでは12世紀以降）で、それについては後述するが、立法府あるいは立法者の存在、そして国体の成立が不可欠であった。余談であるが、憲法と法律に大きな隔たりがある日本は、文治主義国家であるように見える。筆者は、中世初期に誕生した慣習法を束ねる最高法規、すなわち「国教」が中世日本に存在しなかったためであると考えるが、法学者たちは認識していない。改憲の是非を論じる場面で、法学者たちは最高法規の歴史を語る場面がないし、「法治」と「文治」のちがいを語る場面もない。日本国憲法第九条は、文治主義の下で温存するしかない、というのに、だ。

コラム15：人物像の同時代性

文学者は、戦争の同時代性をテコにして歴史を考察するより、人物像の同時代性をテコにして歴史を考察するほうが有意義である、というかもしれない。ソクラテスと釈迦、孔子を同時代の人と考え、思想と政治、歴史を考察する哲学者や社会学者もいる。同様にユリアヌスと苻堅を同時代の人と考え、思想と政治、歴史を考察できるかもしれない。

ユリアヌスを知る哲学者や社会学者が苻堅を語ることなく、苻堅を知る哲学者や社会学者がユリアヌスを語らないのは残念である。ユリアヌスはギリシャ哲学とストア哲学の学徒で、五賢帝のひとりマルクス・アントニウスを尊敬していた。苻堅は儒教の信徒で、儒教を治教化した頃の漢を理想としていた。ユリアヌスも苻堅も誠実な人物で、文治主義的な帝国の建設を試みていたように思う。筆者が知る限り、歴史家や文学者にユリアヌスと苻堅を悪く言う人はいない。本書では、妥当な範囲内で人物像の同時代性にも言及する。

コラム16：　共時性と同時代性の「ちがい」

ローマやサーサーン朝ペルシャでは、国教は治教であり、最高法規である。とはいえ、コラム13で述べたように、魏普南北朝時代の中国は国教を一元していない。グプタ朝期のインドも同様である。したがって、貨幣経済の形態もユーラシア大陸西部の形態とユーラシア大陸東部の形態が微妙に異なる。

だが、グローバル主義者たちは、共時性をテコにして歴史を語り、同時代の「ちがい」を軽視する場合がある。本書では、共時性に依拠しながら同時代の「ちがい」も重視したい、と考える。したがって、「共時性」より「同時代性」という言葉を多用する。

２．５　レベル4パースペクティヴの妥当性

　12世紀後半以降、売り手と買い手の関係が非対称化し、商品交換が不等価交換になる。そして「商い」が不可逆な位相構造を形成するが、もしも4世紀後半のローマ金貨とペルシャ銀貨の交換が同様な不等価交換であったとすれば、貨幣経済と商品経済の数学的基本構造は同じである、というしかない。だが、当時の財貨は商品的側面を有していない。すなわち、当時の財貨は「制度」であり、金銀および金銀クラス間の交換に市場経済下で生じる差益に相当するものは生じない。

（財産も貨幣クラスのメンバであるが、財貨と同類である。古代帝国では、土地＝農耕地も奴隷も支配者層内でのみ循環する「財」であった。とはいえ、中世帝国は古代帝国の統治機構や官僚機構の属性を継承する。古代帝国の属性を継承した結果、中世帝国の財貨が土地や奴隷を財産化したといえる。「広義の近代」の突破期に奴隷が商品化するが、土地から金融商品が派生する場面があっても土地が商品化する場面はない。土地は概ね財産として残る）

　中世帝国の誕生を起点にすれば、中世は4世紀後半からはじまり八十年戦争が勃発する16世紀後半まで続いたと考えるほうが妥当である。すなわち、中世は定説より100年以上早くはじまり、約100年長く続いた。以後、4世紀後半から16世紀後半までの人類史を「広義の中世」と呼ぶ。
　サーサーン朝ペルシャは、アルダシール1世がアルサケス朝から王位を簒奪したときからはじまるが、中世帝国のスキームを確立したのはシャープール2世の代である。他方、ローマが中世帝国化したのはテオドシウス1世の代である。
　中国で最初に誕生した中世帝国は北魏である。サーサーン朝ペルシャもローマも中世帝国のスキームを支える国教＝最高法規と国教会＝統治機構、財貨＝統治制度が不可欠であった。魏普南北朝時代に華北を統一した北魏も同様である。不徹底ではあったが、北魏は仏教を国教化し、均田制を実施した。北魏の均田制はローマの軍管区制に相当する。
　同時代の中国の南朝＝宋も仏教を国教化した。北魏の財貨は絹で、宋の財貨は銅貨である。北魏と宋の間で貨幣経済が誕生する。中世帝国と貨幣経済に着目すれば、「広義の中世」の起点を370年前後に置く筆者のレベル4パースペクティヴは妥当である。

　筆者のレベル4パースペクティヴにしたがえば、「広義の中世」は770年前後に突破期に入る。750年、アブー・アッバースがウマイヤ朝アラブ帝国からカリフの座を簒奪してアッバース朝イスラーム帝国を開国し、金銀複本位制を発明する。アッバース朝イスラーム帝国による可逆な等比交換の制度化＝金銀複本位制は、貨幣経済を内外に広げた。そして銀貨＝銀が秤量貨幣化し、中世帝国の統治制度から離脱して世界制度＝世界通貨になる。その後国教会が経済上の役割を喪失し、ユーラシア大陸西部の中世帝国＝ビザンツ帝国とユーラシア大陸東部の中世帝国＝南宋（あるいは北宋期の遼）が新たな統治制度＝封建制を発明する。他方、世界通貨＝銀の下で突厥やウイグルが中央アジアに王国を建国する。金銀複本位制と世界通貨に着目すれば、770～1170年前後を「広義の中世」の突破期と考える筆者のレベル4パースペクティヴも妥当である。
　「広義の中世」は1170年前後から成熟期に入り、「広義の近代」の出現期が重畳する。すなわち、貨幣経済に商品経済が重畳して経済空間に位相構造を形成する。そして中世帝国が世界帝国に変貌する。神聖ローマ帝国やオスマン帝国、モンゴル帝国や明朝（すなわち「世界帝国」）に着目し、また商品経済に着目すれば、1170～1570年前後を「広義の中世」の成熟期と考え、「広義の近代」の出現期が重畳すると考える筆者のレベル4パースペクティヴも妥当である。
　「広義の近代」は1570年前後に突破期に入り、貨幣経済と商品経済に市場経済が重畳して代数構造を形成する。そして資本＝商人資本が誕生し、さらに産業資本と金融資本が誕生して経済空間が肥大しはじめる。その後「広義の近代」は成熟期に入り、「広義の現代」の出現期が重畳する。

（手短にいえば、「広義の中世」の出現期（370～770年前後）に貨幣経済が誕生して進展し、突破期（770～1170年前後）に金銀複本位制と世界通貨＝銀が普及する。そして「広義の中世」の成熟期と「広義の近代」の出現期が重畳する時代（1170～1570年前後）に商品経済が誕生し、「広義の近代」の突破期（1570～1970年前後）に市場経済が誕生する。市場経済が誕生しても貨幣経済と商品経済は消滅しない。貨幣経済と商品経済は、市場経済の下層を形成する）

　筆者のレベル4パースペクティヴにしたがえば、1970年前後から「広義の近代」の成熟期に重畳して「広義の現代」の出現期がはじまる。以後、レベル4パースペクティヴの下で貨幣と商品、市場と資本の変化を論じる。いうまでもないが、筆者のレベル4パースペクティヴは公文氏の三つのパースペクティヴを内包している。